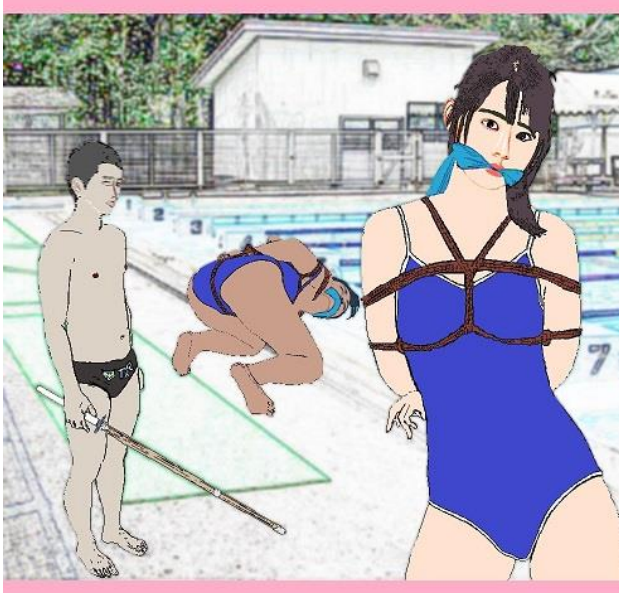
ロリマゾ（蕾の悦虐）第２話

縄と鞭の体育補習



濠門長恭

登場人物　括弧内はマゾネーム

岡下昌美（おかしてマゾミ）
　全寮制一貫教育女子校への中途編入生。体育用具倉庫で自縛遊びをしているところを神田に見つかり、欲求不満の解消策と称して体罰有りの体育補習を受けさせられる。

神田友宏
　体育教師。理事長の甥で、学園の裏ボス。入学時の心理テストなどを参考にして犠牲者を選び、マゾ牝奴隷への調教を施している。馴致された少女は、学園の後援者に献上されることもある。

東美世子（ミセコ）
　昌美と相部屋の上級生。被虐の素質は薄いが、神田に弱みを握られて調教されている。

桃井百花（シモ）
　進学したばかりの下級生。後輩にはタチとして振る舞うが、マゾの本質を見抜かれて、神田に命令された昌美から調教を受ける。

和泉安奈

百花の後輩。ネコ。本編ではあまり調教されないが、昌美の卒業後にいろいろと調教されて、第３話にチョイ役で顔を出す。

野原知子（シッコ）

第１話のヒロイン。昌美の編入前に中途退学扱いで、学園から有力者に献上されて奴隷幼な妻となっている。

柴田花穂＆芽衣（カホ＆メイ）

母親の花穂は再婚前､娘の芽衣は再婚後に、離島の調教施設でマゾ牝に馴致された。娘のほうは、第４話のヒロインに予定。

香純＆薫子（カス＆クソ）

香純は僻村のジモティ。父親と駆け落ちした奴隷妻の代わりとして、村の有力者に飼われている。村人たちからもシチブ（村八分だが、ＳＥＸで弄ばれる一分があるので、七分）にされている。

薫子は両親の都合で一年間だけ山村留学している。香純に同情するうちに、香純の同類として扱われるようになった。

二人は第５話のダブル・ヒロインに予定。

注記

第４話と第５話は執筆前なので、順序が変わるかもしれません。

目次

１．自縛遊戯 ..... - 6 -
２．三穴破瓜 ..... - 35 -
３．緊縛水泳 ..... - 83 -
４．潜水特訓 ..... - 125 -
５．性交実技 ..... - 161 -
６．体罰馴致 - 189 -
７．輪姦学校 - 219 -
８．公開極刑 - 264 -
９．公園露出 - 299 -
１０．幼花蹂躙 - 319 -
１１．双花調教 - 347 -
１２．集団淫交 - 389 -
１３．裸運動会 - 413 -
１４．強制婚約 - 481 -
後書き - 498 -

１．自縛遊戯

放課後。帰宅部のあたしは、教室を出るとまっすぐに校門へ――向かわずに校舎の裏手へまわると、人目をさけて塀に沿って、でも挙動らず堂々と校舎の横にある予備倉庫へ行った。

ゴールデンウィーク明け早々に行なわれた体育祭の前後は人の出入もあったけど、今は予備倉庫の存在さえも忘れられている。そして、植込みにさえぎられて予備倉庫の出入口は運動場から完全な死角になっている。

あたしは合鍵でアルミサッシの引き戸を開けると、マトリックス（古い！）ばりの素早さで中へはいって、内側から鍵を掛けた。念のために空っぽの木箱を立てかけて、絶対に開けられないようにしておく。

さて……と。ここは、ＳＭの宝庫。縄跳び、マット、跳び箱、ハードル。荒縄は荷造りに使ったあまりかな。大小の鉄アレイは、まだ怖い。あたしは、前も後ろも未開通。自分で除膜式をする日も遠くない予感はしてるんだけど。

たぶん、やっちゃうだろう。出会い系は、

さすがに怖い。そもそも、あたしは引っ込み思案で奥手のキャラでとおってる。クラスメートのガールズ・エロトークは平凡すぎて退屈だから、パスしてるだけなんだけど。たしかに、積極的にご主人様を探そうっては考えない。●学生でそんなことを考えてたら、異常以上だよね？

　ええい、気を散らすんじゃない。妄想モード、オン。

（痛い目にあいたくなければ、とっとと裸になれよ。ええ、岡下昌美ちゃん？）

　定年が近い校務員の鹿間さんに脅されて。

「ぶたないで。痛いのは厭……」

　外へは聞こえないくらいの声でつぶやいてから。あたしは制服を脱ぐ。

　七白学園の制服は、十二年間ずっと同じデザイン。ジャンパースカートにリボンタイ。冬は上にジャケット。色は、冬服が紺で夏服が水色。進学に合わせて新調しなくちゃならないのはリボンタイだけ。最初はタータンチェックの蝶タイプで、あたしたちは緑のウエスタン(左右にも一本ずつ張り出してるやつ)。お姉様たちはシンプルな赤の紐。

　この春に買ったばかりの（でも一年しか使わない）ウエスタン・タイをはずして、左脇

のファスナーを下ろしてジャンスカを脱いで、ブラウスまで脱いだところで。恥ずかしそうにためらって、鹿間さんにビンタされてしぶしぶ……てのは、省略。上下おそろのブラとショーツも、ぱぱっと脱いじゃう。

今日は勇気を出して、荒縄に挑戦。首から垂らした縄でバストの上下と恥丘の上と三か所に結び目を作って。ガニ股になって左手でクレバスをクパァして、そこに荒縄をまとめて二本くぐらす。で、背中にまわした縄をぐうっと引き上げ……

「痛い……！」

縄跳びや洗濯ロープとはぜんぜん違う。荒縄の毛羽が粘膜に突き刺さって、鋭い痛みが股間に走った。反射的に、あたしは縄から手をはなしていた。けれど。

（あばれるな。今度はおっぱいにビンタを食らわせるぞ）

両手でバストを揉んで乳首を転がして――もうじゅうぶん勃起してたのに、さらに硬くしこってくる。腰の奥が熱くなって、どんどん濡れてくる。もういちど左手に縄を握って、すこしだけ引き上げてみた。

「くうう……」

痛いけど、なんとか我慢できる。我慢して

ると、子宮がキュンッて痙攣したみたいに切なくなってきた。
（なんだ、感じてるのか？　根っからのマゾだな）
「違う……あたしはマゾじゃない」
（バージンのくせに、縛られてマ●コを濡らして、それでもマゾじゃないってのか？）
　思いきって縄を引き絞って、首の後ろにとおした。
「痛い……」
　ほんとに、すごく痛い。けど、あたしがどんなに痛みを訴えても、鹿間さんは赦してくれない。
　限界まで引き上げた縄を首縄に絡めてから、左右に分けて前へまわし、前の縦縄にくぐらせて反対側へ引き絞った。
「くううううう……！」
　バストの上を圧迫されて、これはすこし気持ちいいんだけど、股間の激痛がさらに強まる。なのに、腰の奥が、そこに心臓が引っ越してきたみたいにドクンドクンと疼いてる。
　背中に戻した縄を、二本まとめたままの縦縄に結び留めて、また前へ折り返すと、今度はバストの下の結び目と恥丘の上の結び目との間にとおして引き絞る。

「ぎいい……」
　こんなに痛みが強いと――もしかして、逝けないかも。そしたら、鹿間さんがクリトリスを滅茶苦茶に嬲って逝かせようとするだろうから。
　胡坐縛りの予定は変更。両脚をそろえて、膝の上を縛った。足首も縛って、太腿は力いっぱいに縄を締めた。くう……股間に食い込んでる荒縄を左右からラビアで挟みつける形になって、目の前で火花が飛び散る。
　足首から伸びてる縄の端に輪っかを作ってから、ごろんとうつ伏せになった。膝を曲げて、手探りで縄の端をつかんだ。環っかに左右から手首を入れて、ぐりんぐりんと捻じると、逆海老縛りの完成なんだけど。
　物足りないんだよね。もっと痛いのがいいって意味じゃなくて。縛る目的は、相手の自由を奪うことだよね。だったら、まっさきに手を縛って。それから本格的な料理にとりかかるのが順序だと思う。最後に手を縛って、それも簡単にほどけるなんて――どんなに痛くてもつらくても恥ずかしくても、緊縛ゴッコに過ぎない。
（なにをブツブツ言ってるんだ。おら、とっとと逝っちまえ）

鹿間さんが、あたしのヒップを踏みつけて、ぐりぐりこねくる。クリトリスを圧迫している荒縄が床に押しつけられて……
「あう……これ、すごい……」
激痛がクリトリスから尾底骨へ突き抜けて、頭の中でスパークする。もう、激痛だか快感だか、区別がつかない。
（おらおら……ケツがぴくぴく痙攣してるぞ。もっと虐めてほしいのか？）
「虐めて……もっとひどくして！」
あたしは太腿をぎゅっと締めて、腰を浮かしては床に打ちつけた。
逝く……そのとき。
カチャッ――と、鍵の開く音。
あたしは凍りついた。
ガタン……ガタガタ。木箱がうまくつっかえてくれて、引き戸は開かない。
「なんだ、これは？」
体育の神田先生の声だ。やばい、まずい。きっとなにか必要なものを取りに来たんだ。開かないからといって、諦めてくれないよね。
あたしは縄から手首を抜いて、物音を立てないように注意しながら脚の縄をほどきにかかった。焦ってるし、手が痺れてて思うように動かない。

そうこうするうちに。
ガタン。うわ……強引に引き戸をはずしちゃった。
ぱかっと長方形の空間が広がって。神田先生ともろに目が合ってしまった。真四角な顔の中のどんぐりまなこ。
神田先生、じっとあたしを見つめて。なにを思ったか、引き戸を元どおりに嵌めなおした。空箱のつっかえがなくなったから、こんどはふつうに開けて倉庫へはいって来て。
カチャ……内側から鍵を掛けなおした。
「岡下さん――だったな。誰かに虐められたのか？」
そうですって言いたい。ほかに言い訳が見つからない。でも、誰に虐められたのかって訊かれたら、答えようがない。いっそのこと、エッチな遊びをしてましたって自白しちゃおうか。でも、そうなったら。生徒指導部からの呼び出し。パパとママにも連絡される。それは絶対に困る。
なんてパニクってると、神田先生がジャージのポケットからスマホを取り出した。レンズをあたしに向ける。
「やめて！　撮らないでください！」
カシャ――シャッターの音。

「これは証拠写真だ。縄はすぐにほどくが、こんなふうに縛られていたという証拠を残しておく必要がある」
「でも……！」
「顔も写しておかないと証拠にならない。こっちを向いて」
　ええい。なるようになれ！
　あたしは顔をレンズに向けた。裸で縛られてる姿を、いつまでも見られていたくない。早く縄をほどいてほしかった。
　神田先生は、前から後ろから何枚も写真を撮ってから、やっとスマホをしまってくれた。あたしの足元にしゃがんで縄をほどきにかかった。けど、すぐに手を止めた。角刈りの頭を上げて、あたしの目を覗き込む。
「妙だな……こんなに厳重に脚を縛ってあるのに、手は縛られなかったのか？」
　う……いちばん痛いところを突かれた。
「自分で……ほどきました」
「ああ、これか」
　足首から伸びている縄の輪を手に取って、神田先生は首をかしげた。
「縛ったにしては大きな輪だな。これで手の自由を奪うとすれば、両手を突っ込んでからねじるしかない。しかも、簡単に自力で抜け

られる」
　先生が、またあたしの目を覗きこんだ。あたしが目をそらすと、顎をつかんで顔を持ち上げる。
「正直に言えば、穏便に図らってやる。自分で縛ったんだな？」
　決めつけられて、あたしは観念した。ていうか、穏便て言葉にすがった。
「あの……内緒にしてくれますか？」
「虐めにしろ独り遊びにしろ、職員会議にかけたりご両親に知らせたりはしない。約束する」
　全身からクテッと力が抜けて。股間に食い込んだ荒縄の激痛が甦った。
「……自分で縛りました」
　体育の授業内容によっては、神田先生が女子を受け持つこともある。そのたびに気まずい思いをするんだろうな――そんなことを考えているうちに、縄をほどかれた。
　そして、両腕を背中にねじ上げらた。
「きゃ……なにするんですか！？」
「ほんとうの緊縛というのを教えてやる」
（……！！）
　犯される――と、そこまで先走ってしまった。緊縛の目的は第一に相手の抵抗を封じる

ことで、男の人が女の子の抵抗を封じる目的は……
「やめてください！」
　手首を重ねて縛られた。自分で縄を巻きつけるのとは違って、まるきり腕を動かせない。
「騒ぐなら騒いでいいぞ。大声で助けを求めるか？　素っ裸で縛られているのを見られて困るのは、おまえだぞ」
「先生だって……問題になります」
「証拠写真がある。ほんとうに縛られる怖さを教えていたと言えば、行き過ぎた教育だとお叱りを受けるかもしれんがな」
　それだけで済むはずがないってことくらい、あたしにもわかる。でも……縛られてレイプってのは、あたしにふさわしいロストバージンかも。
　それに神田先生、同年代の男子から隔離されてる女の子の目から見ると偏差値六十は超えている。筋肉の発達した肉体に角刈りは、いかにも男くさい。
　なんてことを考えてると、手首を縛った縄がバストの上を巻いて、後ろで留められた。
　神田先生が倉庫の隅から新しい荒縄をもってくるまで、あたしは横座りになって、おとなしくしていた。その縄がバストの下を縛っ

た。それだけでも息が苦しいのに。脇の下に縄がとおされて、上の縄と下の縄をひとまとめに絞られた。バストがぎゅううって絞り出されて、痛いんだけど……。
「あうう……」
　頭がふらついて、目の前がすうっと暗くなった。身体から力が抜けて、先生にもたれかかった。
「驚いたな。いきなり縄酔いか」
　その言葉、ネットで見たことがある。腰の奥がどろどろに溶けたみたいで、熱い蜜がにじみ出るのが自分でもわかる。あたしって、やっぱり真性マゾなんだな。
「どうだ？　これが本物の緊縛だ。もう、自縛なんて馬鹿らしくてする気にならないだろう？」
　あたしは、こくんとうなずいてた。もう、このまま犯されてもかまわない。ううん、犯してほしい。すっかり、その気にさせられたのに。
　胸への圧迫が軽くなった。シュルシュルと縄が肌をこする。
「え……？」
　あたし、おもいきり欲求不満の声を漏らしてた。だって、あっというまに縄がほどかれ

た。
「もうすぐ下校時刻だぞ。ちゃんと鍵を掛けておけよ」
　神田先生、裸のあたしを置き去りにして倉庫から出てっちゃった。

　寮へ帰って。倉庫で身体じゅうに着いた汚れを隣の部屋と共同のシャワールームで洗い流して。
　先生のあの縛り方。絶対経験をつんでるよね。もしかしてサディスト？
　だとすると。あたしを襲わなかったのは、教育者としての立場を自覚してだったら仕方ないけど、あたしに魅力がなかったからだとしたら……傷ついちゃう。胸だっていちおうＢカップなのに（やっぱ、小さいかな？）。
　もしかしたら年齢かな。神田先生は、たしか三十五歳。あたしなんて、低めのボール玉なんだろう。きっとそうだ。
　でも、でも……こんなことになったのは、元はといえば神田先生のせい。ライン引きが壊れたから予備倉庫のを持ってこいって鍵を貸してくれて。それで、こんな場所があったんだって発見した。下心を持って鍵を返し忘れて。休日に街まで出て合鍵を作ったのが、

今年の二月。
　あれ？　てことは、今日のは運命の出会い？　まさかね。
　シャワーをすませて。もう食堂は開いてるけど、まだお腹は減ってないので、二段ベッドの梯子を上がった。
　相部屋の東美世子さんは、まだ塾から戻ってない。自動的に内部進学する人がほとんどなのに、東さんは受験組。一緒に暮らして一か月半になるけど、ぜんぜん打ち解けてない。東さんはすごい美人ですごく頭がよくて物静かで、ちょっと近寄りがたい。あたしはあたしで、妙に先輩って意識があって。学部違いの三年同士って組み合わせが良くないのかもしれない。
　この学校は、●校と●学とが全寮制。一部屋に二人で。最上級生と最下級生、二年生同士、上の一年生と下の三年生。この組み合わせが原則。年齢がはなれたペアなら、面倒を見る側と見られる側とが歴然としてる。年齢が近づけば、先輩後輩てより、友達同士な雰囲気。
　ま、それは原則だから。あたしは下の二年途中から転入して、上の二年生で一人住まいだった東さんと相部屋になって。そのまま持

ち上がっちゃった。
　あと、東さんは百合だから。価値観とか趣味とかが、あたしとは合わないってのもある。
　あ、百合ったってレズの意味じゃないよ。最初からずっと七白学園て意味。純白だから百合。●校からの編入は、世間のアカに染まってるという意味をこめて薔薇。●学からの子は白と赤を混ぜたピンクの桜。あたしみたいに二年の途中からってのは、なんていうんだろ？　姥桜？
　さいわい、この学園はイジメとかにやかましくて。中途編入でも、そういうのはなかった。あまり友達はできなかったけど。
　だから、ひとり遊びに耽った――というのは、嘘。物心ついたときには、戦うヒロインが毎回監禁されたり磔にされたりするアニメに夢中だったし。小学生の頃は、世界征服を企む男の子たちの秘密基地に拉致されて縛られたりしてた。でも、縛られるっても形だけで……今日みたいに、まったく手を動かせないのが、ほんとうの緊縛なんだと、あらためて実感。自分では絶対にできない。思い出すと、どろっと蜜があふれてきたので。
　あたしは布団を頭からかぶって、ショーツを膝までずらした。

それから一週間、退屈な学園生活が続いた。倉庫には二度と近づく気になれなかったので。オナニーも、部屋でちょこちょこっとしかできない。

この学校に慣れるために二年の三学期に転校したんだけど、四月までは帰る家があった。でも、パパが三月にヨーロッパの支社に赴任して、あちらじゃ夫婦同伴のセレモニーが多いとかで、ママも連休前にパパを追っかけてって。住んでた戸建ての家は、期限付きで親戚の人に貸しちゃって。だから、あたしは休日も寮に残ってる。

東さんが親元へ一泊二日でもしてくれると好都合なんだけど、この人もなぜか、二年のときから居残り組。塾で帰りは夕方とわかっててても、具合が悪くなったり忘れ物をしたり休講になったりで不意に帰ってくるかもしれない。そうでなくても、暇を持て余した居残り組が不意にノックするかもしれない。

秘蔵のローターはともかく、洗濯ロープも洗濯バサミも、我慢我慢。

だけど。その退屈でオナニーもろくにできない一週間が、あたしの人生に残されていた最後の平和で平凡なひとときだった。

水曜日の放課後。あたしは神田先生に呼び出された。公然とじゃなくて、体育の跡片付けをしてるとき。あたしの横に立ってよそを見ながらボソッと。
「放課後にカウンセリング室へ来い」
あんなことがあっての、これだよ？　絶対になにか起きる。
で。これ以外の服装は見たことがないジャージ姿の神田先生と、カウンセリング室で向かい合って座って。
パサッと目の前に数枚の紙が置かれた。
「きゃ……！」
半分は乙女としての演技だけど、半分はほんとに驚いた。だって。全裸に菱縄を掛けられて床に転がってる女の子の写真。これで脅迫されるんだ――不安が大きくて濡れるどころじゃない。
「こういう遊びは危ないんだぞ。サルグツワで窒息したり、縄で首吊りになったり。ほどけなくなって、誰にも発見されずに衰弱死した者もいる」
うわ。マジでお説教？
「しかし、無理にやめさせても欲求不満がつのるばかりだろうな。おまえは部活をしてい

ないから、なおさらだ」
　●学三年でいまさら新入部員てのは、いやだ。それよりも。今たしかに**おまえ**って。下の名前を呼び捨てにするだけで、ＰＴＡが騒ぐご時世なんだよ？
「聞いているのか！」
　怒鳴られた。
「……はい。●校に上がったら、部活をします」
「先生は、今のことを言っているんだ」
「……はい」
「これからは週末ごとに課外補習をしてやる。補習に打ち込んで、欲求不満を解消させろ」
　マンツーマンの課外補習。それって、性教育の実技――てのは、あたしの妄想かな。
「最初に言っておくが、補習は厳しいぞ。課題をクリアできなければ体罰だ」
　がたん。先生が立ち上がって、あたしの後ろにまわった。
　肩越しに左のバストをつかまれた。
「きゃ……！」
「騒ぐと人が来るぞ。テーブルの上の写真を見られてもいいのか？」
「でも……痛い！」
　服の上からだけど、バストをぎゅっとわし

づかみにされた。
「体罰はもっと痛いと思え。これくらいは気合注入だ」
「手をはなしてください」
「先生の指導に逆らっても体罰だ。口答えも許さん。わかったな」
　布地に先生の指が食い込んでくる。
「……わかりました」
　そう言わなきゃ赦してもらえない。
「しかし、厳しいばかりではないぞ。ちゃんと課題をクリアして、補習を受ける態度もまじめなら、褒美をやる」
　先生の右手がスカートをめくった。つううっと太腿を撫で上げる。
「やめてください。こんなのセクハラです！」
　いちおう抗議しとかなくちゃ。
　でも、先生はあたしの心なんか見透かしてた。
「セクハラとは性的嫌がらせのことだ。これはセクデラだ」
「なんですか、それ？」
「セクシャル・デライツメント。性的嬉しがらせだ」
　先生の指がショーツの上からクリトリスをつつく。自分で刺激するのとは、まるで違う。

鉛筆でつついたりするのとも違う。指の動きが予測できないから、不意打ちの連続。そのたびに快感のスパークが腰の奥へ突き抜ける。ショーツがじわっと濡れていく。
　けれど、強制された快感は長く続かなかった。
　先生があたしからはなれてドアのところへ行った。また蛇の生殺しで帰される――んじゃなかった。先生はドアを細く開けて、近くに人がいないのをたしかめたみたいだった。
　深刻な相談をしてることもあるから、用のない者はカウンセリング室には近づかないという不文律がある。校舎の端っこ、わざわざ廊下を曲がった突き当りにあるから、他の用事で誰かが通りかかることもない。
　それなのに人の気配をたしかめて。あ、ちゃんとロックも掛けた。こんなに用心をして、あたしになにをするつもりなんだろう？
「素っ裸になれ」
　あたしは耳を疑った。
「補習は体育が中心になる。授業よりずっと厳しいカリキュラムを組むから、どこまでなら耐えられるか、事前に調べておく」
　あたしは先生の言葉を真に受けて緊張した。だって、ただ裸にさせるんなら、あの写真で

脅せばすむことだ。
先生には、もう裸を見られてるし。自縛遊びをするエッチな娘で、縛られて縄酔いするマゾだってバレてる。あのまま犯してほしいとまで思ったんだし。
あたしは黙って立ち上がった。ジャンスカのファスナーに手をかけると。
「そこは机が邪魔になって動きにくいだろう。こっちへ寄れ」
肩をつかんであたしを斜め後ろへ動かしてから、先生は自分の椅子に戻った。
あたしは、なぜか斜めに向かされてて、やたらゴテゴテした造花の生け花が正面にある。まあ、先生に真正面から眺められるよかましだけど。
あたしはジャンスカを脱ぎブラウスを脱いで。ためらいってよりも乙女（かなあ？）のたしなみとして、手を止めた。
「ひとりで脱げないのなら、手伝ってやるぞ」
先生が立ち上がった。
どうしようかな？　男の人にかぎらず、他人に下着を脱がされるなんて、たぶん生まれて初めて。なので。両手で自分の胸を抱いて、じっとしてた。
先生はあたしの後ろにまわって、いきなり

ショーツをずり下ろした。
「ひゃ……！」
　両手でショーツを追っかけて前かがみになったら。プチン。ブラのホックをはずされて、乱暴に腕から抜かれた。
　ほんとに裸にされると、やっぱり恥ずかしい。それに、怖い。あたしはうずくまってしまった。
「それでは調べられない。しゃきっと立て」
　それでも動かないでいると。
「きゃあ……！」
　あたしはバネ仕掛みたく立ち上がった。だって、ヒップの割れ目をつま先で蹴られたっていうか持ち上げられた。
「手を頭の後ろで組んで……脚を開く」
　言葉だけじゃなく手と足も使って、先生はあたしに捕虜のポーズを取らせた。戦争（がテーマじゃなくて恋愛）映画で一度だけ見たことがある。ＳＭのアダルトサイトでは、しょっちゅうお目にかかってる。だから、捕虜のポーズってよりは受虐待ちの姿勢？
　いざ自分でやってみると。脇の下から股間まで、なにもかも男の人の目に晒して、すごく恥ずかしい。それに無防備ってやつ？　なんだか、なにをされても仕方ないって気分に

なってくる。
　あ、やば。腰の奥が熱をおびてきた。じわあっと濡れ始めてる。
「胸の発育が遅れているな」
　くそ、この無神経男。本質的な欠陥をあばくんじゃない。
　カップのサイズを訊かれて、正直にＢですと答えたら。先生、ブラジャーを拾ってタグを調べた。
「六十五のＢか。七十のＡを無理したな」
　うぐ。図星。体育の先生だから、女子の発育についても詳しいみたい。
　先生は背後からあたしのバストを掬いあげて、人差し指でコリコリと乳首を転がした。
「くう……やめてください」
「先週縛ったときはＣに見えたぞ。鞭で腫れあがらせればＤまでいくかな？」
　あたしの抗議を無視して、とんでもないことを言う先生。
　ぞくっと背中に鳥肌が立ったのは、想像もつかない痛みへの怯えと。縛られてたら逃げられないという……期待？　激痛が快感にすり替わるのは、荒縄の股間責めで知ってしまった。
　先生の手がバストからはなれて二の腕をつ

かんだ。
「華奢だが、それなりに筋肉と脂肪も着いている。縄がよく食い込みそうだ」
「なんで縛られなければならないんですか。体育の補習なんでしょ？」
「体罰と言ったぞ。俺の体罰は、縄と鞭が基本だ」
　先生の両手が、直径を測るみたいにウエストをつかんだ。
「けっこうあるな」
　ぐぬぬ……て、本気で怒っちゃいけない。これって言葉責め？
「男の上で腰を振っていれば、じきに引き締まってくる」
　すぐには意味がわからなかったけど。性教育の実習なんだと気がついた。あたしに拒否権はない。写真で脅されて……騎乗位を強制されてのロストバージン。ぼうっと頭に霞がかかった。
「ケツは立派だな」
　ヒップをねちっこく撫でまわされて。気持ちよくなんかないのに、腰の奥がますます熱くなる。
「ここは、手加減なしで叩けるな」
　言葉のひとつひとつに、そうされているシ

ーンが頭に浮かんで。心臓が子宮に引っ越してきた。
「罰を与えるのも褒美を与えるのも、女にはここが一番だが……」
「あ……ん」
　クレバスをツウーッと逆撫でされて、反射的に腰を引いたら。
　パシン！　ヒップを叩かれた。
「勝手に動くな」
　だから、ちゃんと手は頭の後ろで組んでるし、脚だって閉じなかった。すこしは褒めてほしい……けど、どんなご褒美をもらえるか、それも怖いんだか期待してるんだか。
「机の上にあお向けに寝ろ」
　そのときは、ほんとに先生の意図がわからなかった。
　先生は、あお向けになったあたしの足首をつかんで持ち上げた。
「いやあ……」
　左右に開かれて、身体を二つ折りにされて、恥ずかしさが全身から吹き出した。
「自分で膝を抱えていろ」
　それって、自分で股を開いていろってこと。あまりの恥ずかしさに、あたしはなにも考えられなくなって、頭がぼうっとしたまま、言

われたとおりにした。ということにしとく。
　先生があたしの股間を真正面から覗きこんだ。
「綺麗なサーモンピンクだな。おや？」
　ずぬうっと、指が侵入してくる。タンポンのアプリケータより太いけど、ちょっと違和感ていう程度。けど、突然。
「痛いっ……！」
　なにかが限界を超えて引っ張られたような痛み。は、すぐに消えた。
「驚いたな、処女か。しかし、ローターを挿れたとか、ここで悪戯をしたことはあるな？」
　さっきと同質だけど、ずっと軽い痛みが、ツンツンと繰り返された。
「ないです。嘘じゃありません。自縛したりクリトリスを虐めたりはするけど、ば、ば、バギナは悪戯してません」
　なんでだろう。正真正銘のバージンだと先生に信じてもらいたいって、必死になってる。
「そうか。教育のし甲斐があるな」
　俺の色で染めてやる――なんてフレーズが頭に浮かんだ。
　それで検査はおしまい。あたしは着衣を許された。
「最初の補習は水泳だ」

　えーっ？　うちは屋内プールで、水泳の授業も六月には始まるけど。でもなんで……あ、いちばん裸にちかい授業だからかな（という認識が大間違いだったと、三日後に思い知ることになる）。
「おまえは、まだうちの学校の水着を持っていないだろう。それは俺が用意してやる」
「……」
　どんな水着を用意されるんだろ。すごく愉しみ（じゃなくて！）厭な予感がする。

　木金は、神田先生からの接触がなかった。あたしは、土曜日になにをされるんだろうかと、そればかり気になって授業も上の空。放課後はまっすぐ寮に帰って、隣の気配を気にしながらオナニー。木曜なんか、一日でローターの乾電池を使い切っちゃった。
　だけど、今日は。オナニーはお預け。ほかにすることがある。
　今どき、アンダーヘアのお手入れは常識だよね。ワックスとかレーザーとか。それに、性教育実習があるみたいだから、毛切れ予防をしとかなくちゃ。てのは、自分への言い訳で。どこでインプットされちゃったんだろうか。アダルトサイト、それともエロ同人誌か

な。あたしの頭の中では、マゾ（男でも女でも）＝パイパンって公式が成立してる。
　課外補習って名の調教を受けるんだから、身だしなみをととのえなくちゃ。
　ドアのロックを再確認してから、部屋の中で全裸になった。ドレッサーに映ってるあたし。うう、たしかに貧乳――てのは断乎認めなくて微乳ではない美乳。去年の夏頃は上半分がえぐれてたけど、今はそれなりにふっくらしてきた。顔は、まあ人並かな。鼻はちっちゃめで日本人ですって形してるけど、いちおう二重だし、唇は肉感的てことにしとく。断じてタラコではない。むしろ、おちょぼ口だよ。校則で、頭髪は肩についたら結ぶことになってるので、耳の下で結んだツインテ。
　全体として我ながらロリッぽいと思う。股間の縮れっ毛は似合わない。ので。ビニールシートを床に敷いて。鋏で散髪。それからシャワールーム。
　洗い椅子に腰かけて。いつものように除毛フォームを腋に塗って。それから、意を決して股間にも。Ｖラインだけじゃなく、ＩラインもＯラインも。
　これで十分、ぼけ～っと待つ。除毛フォーム自体、エッチでもなんでもない。剃刀負け

したり、うっかり切ったりする心配がないから、愛用してる子も多い。
　問題はお風呂だけど。寮のお風呂は使わないって子も少なくない。あたしも、今日から仲間入り。ほかの子は週末に家ではいってるんだろうけど、あたしは……ま、どうしてもはいりたくなったら考えよう。
　二回ひっくり返した砂時計が落ち切って。専用のスポンジでこすると、つるつるのお肌。Ｉラインもこすろうとして……
「ひゃっ……！」
　床までつるつる。転びかけた。も、恥も外聞もない。四つん這いになって肩を壁に押し当てて、ごしごし。
　最後にお湯でフォームを洗い流す。
　部屋へ戻ってドレッサーの前に立って。無毛の股間って、すごく卑猥。クレバスからちょぴっと具がはみ出てる。なんて見てると、クリトリスがきゅうんって切なくなった。
　それでも、すぐに弄るのは我慢して。二日前に先生から命じられた受虐待ちのポーズをしてみる。
　開いた股の間から具が垂れているのが丸見え。すごく卑猥。あ、でも。横向きになって、背筋を伸ばすと――バストアップしてる。乳

首がとんがって、ツンと上を向いてる。やっぱり卑猥。
　ピンポーン
「七時です。あと三十分で食堂を締めます。まだの人は早く食べましょう」
　うわ。下着を替えてもすぐ汚しそうなので、脱いだのをまた着て。昨日と同じ部屋着でいいや。食堂へ駆け込んではいけないので、優雅に歩いてった。

２．三穴破瓜

午後一時半。入構簿には「図書室で課題の資料探し」って嘘っぱちを書いて学校へはいって。校舎を通り抜けて体育館へ行った。階段を延々と三階分ほど上がった踊り場に、いつものジャージ姿で神田先生が待っていた。あたしは、いちおう登校なので制服。

「ちゃんと来たな」

階段の向こうはシャワー室で、右が更衣室。左にある小さなのは、男性教諭用。神田先生は、平然と右の更衣室へはいった。やっぱり着替えるところを見られるんだと、覚悟を決めてついてくと、素通りでプールに向かう。

（……？）

裸で泳がされるんだろうか。なんて疑問は、吹っ飛んだ。

「えええーっ！？」

男の人が四人も、そこに立っていた。見たことのない人ばかり。四人とも、ふんどしを締めてるだけの裸。

「おまえのコーチをしてくれる皆さんだ。挨拶しなさい」

コーチ？　水泳の指導なら神田先生だけで

……あーっ！　まさか！？　輪姦って単語が頭の中で炸裂した。だけど、この人たち。どういう人なんだろ。掲示板で集めるなんて軽率なことは、しないはず。外部に漏れたら、行き過ぎた教育じゃ絶対にすまない。神田先生、ＳＭサークルみたいなのにはいってるのかな？
「こら、まぞみ。聞いているのか！」
　え……？　今、なんて？
「しょうがないやつだ。この子がコーチをお願いした『おかしてまぞみ』です。ほら……」
　ぐいと頭を押さえられて、しかたなくお辞儀する。
「……よろしくお願いします」
「課外補習は五時まで。あまり時間がない。さっさと着替えろ」
「あの……でも、水着が……」
「まず素っ裸になれ。そうしたら水着を渡してやる」
　やっぱり。この人たちにも裸を見られるんだ。すごく恥ずかしい……って思うと、腰の奥に火がついちゃった。
　で、後ろ向きになったら。
「ケツを向けるのは失礼だぞ。ちゃんと正面を向け」

素直に従って。男の人の前で制服を脱ぐのは、これが二度目。今日は気合をいれて、おニューでおそろの、ベビーピンクのブラ＆ショーツ。ちょっとでも手を止めると、動かせなくなりそうなので。ぱぱっと脱いだ。
「手を頭の後ろで組んで脚を開く。コーチの皆さんに、発育の具合を見てもらえ……ん？」
先生が首をかしげた。
「おまえ、マン毛を剃ったのか？」
「はい。あたしは休日に先生の手をわずらわせる駄目な生徒です。反省してるってわかってもらうために、坊主になりました」
あらかじめ考えといた台詞。
「いい心がけだ。褒めてやる」
先生の手が股間に伸びる。あたしは姿勢を崩さずに、じっとしている。
「あ……くうん」
クリトリスを包皮ごと軽くしごかれて、快感のさざ波が腰を貫いた。
「牝への罰も褒美も、ここが基本だからな。剥き出しのほうが効果的だ」
繰り返しクリトリスを愛撫されて、あたしは軽く逝ってしまった。受虐待ちのポーズを崩して、床に膝を突いた。
その目の前に、白い布が落ちた。

「それが、おまえの水着だ」
　手に取って広げてみると――極薄生地の競泳用。ていうより、露出プレイ用のシースルー。それだけでも、じゅうぶんに恥ずかしいのに。胸の下に名前が手書きされてる。『おかしてまぞみ』さっきのは聞き違いじゃなかったんだ。これは、本気で屈辱だ。まあ、あたしの秘められた願望を的確に表現してはいるんだけど。
　水着を着ても、全裸と変わりない。硬くなった乳首も膨らんだクリトリスも充血したラビアも、ラインが見えてるだけじゃなくて薄っすら透けてる。水に浸かれば、薄っすらどころじゃなくなるだろうな。
　着替え終わったら、最初は準備運動。四人のコーチに囲まれて、テレビ体操から。前後の二人は竹刀を持ってる。
「もっと、伸び伸びと」
　曲げた脚のあいだに竹刀を差し入れて股間を持ち上げられる。
「腕に勢いをつけて」
　腋の下を両側から叩かれる。
「もっと身体を倒して――胸を反らす」
　ヒップを叩かれ、バストを突かれる。
　叩くっても、音がするほどじゃないから痛

くはない。最初の二回は不意打ちで驚いたけど、三回目からはぶりっ子悲鳴もあげなかった。竹刀で叩かれること自体は屈辱だけど、こういうシチュエーションでの屈辱は受虐って単語に置換されちゃう。エッチなとこばかり狙われるから、なおさら。

テレビ体操のつぎはストレッチ。

開脚して座って、上体を脚に沿って曲げる運動のときは――背中とバスト（は、しっかり揉まれた）を両手でサンドイッチにして背骨がメキメキいいそうなほど倒された。

片脚を横へ伸ばしての屈伸運動は――股間に押しつけられた竹刀で上下左右に揺すぶられた。

きわめつけはブリッジ。姿勢を崩すなって言われて。竹刀を股間にこすり着けられた。快感ていうか、腰が砕けそうになる。

「くうう……」

両手両脚を突っ張って耐えてると。バストに竹刀が当てられて、すうっと上がって。

「痛いっ……！」

不意打ちじゃなかったから、ぎりぎり耐えられた。

神田先生は四人にまかせっきりで、自分はジャージ姿のまま腕組みをして眺めてるだけ。

あれ？　いつもは見たことのない、大きな腕時計を嵌めてる。もしかして、腕時計型の端末？　写真か動画を撮影してるんだとしたら――抗議するのも今さらだよね。全裸自縛の一枚で、じゅうぶんに致命傷なんだから。あたしにとっても先生にとっても。

それに、抗議するのは本気で怖い。おとなの男性が五人だよ。エッチがからまない暴力をふるわれたら、ただじゃすまないと思う。

準備運動が終わって、いよいよ入水ってとき。

「神田先生」

プールの出入口に六人目の男性が現われた。灰色の作業服。妄想の中でご主人様や強姦魔や誘拐犯や人身売買ブローカーになってもらってる、住み込み校務員の鹿間さんだ。六十歳にちかいはずだけど、中年パワー炸裂の脂ギッシュな小父さん。

見られた。通報される。それとも、先生がうまく誤魔化すんだろうか――なんてパニクッてるのは、あたしだけ。

「業者の都合で、照明の交換工事が今日に繰り上がりました。申し訳ありませんが、連絡するまでプールから出ないでください」

あたしは神田先生の後ろに隠れてたけど、

前へ押し出されて両腕を背中でつかまれた。鹿間さん、目の前まで近づいて、あたしのセミヌードをたっぷり鑑賞。
「今度は●学生ですか。それにしても、相変わらずのパイパン好みで」
「チャンスがあれば、本物のパイパンにも補習を受けさせたいと思っているよ」
「いやはや……」
　鹿間さん、何度も振り返りながら出てった。
　動転しながらも、今の短い会話に含まれている情報は聞き洩らさなかった。
　つまり。『今度は』ってことは、先生、何人もの生徒に手を出してるんだ。
　鹿間さんはそれを知ってて、今日もここでなにが行なわれてるか知ってて、注意するどころか、連絡を口実に見物に来たんだ。
「さて。おまえは一昨年までスイミングスクールにかよっていたそうだな」
　神田先生、あたしに向きなおって。実力を見せてみろと言う。エッチモードでは、その気になれないんだけど。
「二百メートル個人メドレーを泳げ」
「あたし、バタフライは苦手なんです」
「ドルフィンキックくらいは、できるだろう。とにかく、ひととおり泳げ」

へたに逆らうと体罰。あたし、緊縛は大好きで、露出も●学校でノーパン通学に目覚めたくらいだけど、痛いのは（妄想じゃなくリアルは）基本的にパス。
スイムキャップはもらえなかったので、ツインテをほどいて、高い位置でポニテに結わえなおした。
いちどプールにはいって――うわ、冷たい。温水じゃないんだ。身体を慣らしてからスタート台に立って。
「よーい、ドン」
先生の合図でスタート。できるだけ長く潜ってから、ドルフィンキック。水を掻くために両腕を上げると、行き足が止まった。息継ぎのときだけ両腕を使って、あとはドルフィンキックで向こう側まで行った。ここまでの無様を挽回するつもりで、クイックターンはピシッときめた。で、また二十五メートルをバチャバチャ。
そのままあお向けにターンして背泳ぎ。けっこう得意なんだけど……四人のコーチ、プールサイドであたしを追いかけてる。水を掻くときに顔を高く上げて――やっぱりだ。白の水着は完全に透けて、乳首の色もまるわかり。限りなく全裸にちかい。

「ぶほ……」
　水を飲んじゃった。気を取り直して。今、露出っ娘だって自認したばかりじゃん。
　開き直ると、四人を逆に観察する余裕ができた。白髪混じりで細身のお爺さん、メタボの小父さんとナイスミドル（死語）、最後のひとりはオタクっぽい若い人。ナイスミドルって言っちゃったけど、メタボ小父さんよりは明らかに若い。先生よりちょい年上な感じだから、四十歳手前かも。厳密にはミドルじゃないかもしれないけど、ちっちゃな子には二十歳の女性が小母ちゃんに見えるのと同じ理屈で、●学生のあたしにはミドル。
　そのナイスミドルは別格として、あとの三人は偏差値四十五以下のところ、六尺ふんどしで五ポイント上乗せ？
　平泳ぎはそこそこ、自由形は余裕で泳ぎきった。
「決まりましたね」
　プールから上がったあたしを取り囲んで、神田先生が誰にともなく言った。
「バタフライの特訓ですな」
　ナイスミドルが応じた。
　へえ……意外な展開。バストも股間もまる見えの背泳ぎとか、大開脚の平泳ぎじゃなく

て、バタフライ。ほんとの特訓になりそう。
　てわけで。今度はプールにはいってから泳がされた。
「顔を上げようとするな」
「腰から動かせ」
「太腿で蹴り下げろ」
　プールサイドの神田先生に、あれこれ言われて。指示に従おうとすると、ますます動作がチグハグになっちゃう。
　ほかの四人はプールにはいって、あたしを取り囲んで悪戦苦闘ぶりを見物してる。ただ眺めてるだけで、さわってきたりはしない。
「水着が窮屈で、動きづらいのと違いますか」
　なんてこと言うのよ、このオタク。
「もっともな意見ですな」
「筋肉の動きを見るためにも、裸で泳がせるべきじゃな」
　メタボと爺いが同調する。ま、着てても着てなくても変わりない水着だけど。
「いやあ。教育の場で全裸というのは、さすがにまずいですから」
　神田先生が、すごくまともな意見。だけど、続きがあった。先生はプールから出ていって、白い布を持って戻ってきた。
「せめてふんどしくらいは締めさせましょ

う」
　そうきたか――って感じ。だけど、マン筋を隠せるだけでも、透け透け水着より露出度が低いと思う。別に不満じゃないよ。股縄じゃなくて褌は初体験。興味津々。
「プールから出なさい」
　先生、ときおり教師口調に戻るけど。あたしが、えー？　でもお……なんて、もじもじしてると。
「命令に逆らうのか？」
　ドスの利いた声に変わる。予想してても、びくっとなっちゃう。
　あたしはプールから出て、皆さんに正面を向けて水着を脱いだ。
　先生が布をほどいた。六尺ふんどしっていうけど、晒し布の長さは三メートルくらいあった。布の端から一メートルあたりのところに、先生は大きな結び玉を作った。
　その目的は明白だから、見てるだけでじわあっと濡れてきちゃう。
「端を押さえててください」
　あたしの左肩に掛けられた布を、オタクさんがバストごと押さえた。
　先生は無言で膝をこじ入れて、あたしに脚を開かせた。内側のラビアまでクパァして結

び玉を埋め込む。
「くふう……ん」
　ぎゅううっと締め込まれて、圧迫感がそのまま快感。苦痛は、ほとんどない。
　後ろに引き上げた布でウエストを水平に巻いて、ヒップから立ち上がっている根元に絡みつける。あたしがもういちど呻くまで引き絞ってから、布の端をウエストに巻いた部分（ヨコミツというんだって、あとで教わった）に何度もねじつけて、余りは鋏で切り取った。
　肩に掛けられてた布が、ぴいっと二つに引き裂かれた。二本をひとまとめにすこし垂らして――クリトリスの真上で、最初のタテミツに両側から巻きつけられて何度も結ばれて。しゅっしゅっと布がタテミツをくぐるたびに、クリトリスに電気が走って、頭がぼうっとしてきた。
　それから、布を左右に分けられて。鼠蹊部っていうの？　太腿の付け根をくぐらされた。ヒップの上でタテミツとヨコミツとをまとめて括って、最初の布の端とは反対側へ引っ張られて、同じようにねじ留められた。
　これって、肝心な部分を隠してるんだか強調してるんだか。はっきりしてるのは、刺激が強くて、歩いただけで逝きそうになるって

こと。ドルフィンキックなんて、無理。
　でも、プールに追いやられて。も、やけくそで身体を水中に投げ出して。
　ヒップを上げて腰をうねらすように――なんて、できっこない。そんなことしたら、一発で逝っちゃう。膝を曲げて脛を水面にぶつけるだけで精いっぱい。いつもと勝手が違うし、意識はクリトリスにいっちゃってるから、腕のタイミングがとれない。何度も水を飲んで、二十五メートルの途中でギブアップ。
「基礎のドルフィンキックができていないから、そうなるんだ」
　神田先生が決めつける。また更衣室へ引き返して、今度は縄を持ってきた。
　縛られる――そう思っただけで、腰の奥が熱く疼いちゃった。のは、ふんどしの瘤のせいにしとく。あ、でも。縛られて泳がされるのは、かなり怖い。おとなが五人も見守ってくれてるから、溺れはしないだろうけど。
　荒縄じゃなくて白い滑らかな縄で。三日前に倉庫で縛られたと同じに、後ろ手に縛られてバストの上下に縄を巻かれて脇の下で絞られた。今日は、さらに縄が足された。手首を肩甲骨の高さまで引き上げられて、肩をまたいで胸縄が中央で絞られた。

「ほほう。グラマーになったな。女の子としては嬉しいじゃろう？」
　お爺ちゃんがからかう。あたしの美乳は上下左右から圧迫されて、まん中へ集まろうにも追加の縄にさえぎられて、むにゅっと前へ押し出されてる。無惨に変形しちゃったバストがかわいそう。あたしは見下ろすしかできないけど、正面から男の人が見たら、どう思うだろ？
　アンバランスなのかな。神田先生がバストをつかんで、縄の囲いから引っ張り出すみたいにして、形を整えた。ついでに乳首を転がしたり痛いくらい強く揉んだり――は、してくれなかった。ので、自信喪失の欲求不満。
　またプールに戻されて。ドルフィンキックだけで二十五メートルを泳げと、厳しい口調で言われた。
「途中でやめたら体罰だからな」
　うう。体罰って、なにをされるんだろ。基本は縄と鞭って、先生は言ってた。今日は、罰の基本はここだって、クリトリスをこねくった。二つを合わせると――背筋を恐怖が駆け抜けた。
　ひとり遊びで、乳首なら洗濯バサミを二十秒は耐えられるけど、クリトリスは一瞬。一

度だけデコピンしたことがあるけど、股間を押さえてのたうちまわった。それを鞭だなんて……そもそも鞭打たれた経験がないから、痛みを想像もできない。
　とにかく、泳ぎきらなくちゃ。壁に背中をくっつけて、身体を沈めると同時に強く蹴った――つもりだったけど、タイミングが合わなかった。ふだんは意識してないけど、手で水を掻いたりバランスをとったりしてるんだって、初めて体感した。
　へろへろっと前へ進んで、行き足が止まらないうちにキック開始。脛が水面に当たった瞬間、ちょっとだけ腰を持ち上げてみた。
「ぶぐっ……」
　クリトリスから突き抜けた快感が泡になって口から吹き出した。
　やっぱり無理。腰、太腿、脛、つま先と水流を作れない。縛られてなくても苦手な動作を、縛られてクリトリスを刺激されてて、できるわけがない。
　バッチャン、バッチャンと脛で水を叩いて。プールの底が、ものすごくゆっくりとしか動いてくれない。息が苦しくなってきたので、ボコボコッと吐き出して。浮力が減って沈み始めたので、あわてて顔を上げて。

「ぶはっ……」
派手に水を飲んじゃった。けど、すこしだけ空気も吸えた。
今度は息を吐きながら力いっぱい脛で水面を叩いて、ぐうっと胸を反らすと。縛られたバストがぎゅうっと圧迫されて。それでも、さっきよりはたくさん息継ぎができた。
こんなふうに縛られてたら、どんな動作も自分を虐める結果になる。
エッチモードなんか、どっかにすっ飛んで。縛られてるのもクリトリスを刺激されてるのも、うっとおしいを通り越して嫌悪しか感じられなくなって。限界までがんばったけど、中央ラインを越えたところで力尽きた。
罰を覚悟で立とうとしたけど、手で水を押せないから、身体を起こせない。あ、そうか。息を吸いたいのを我慢して、水平に浮かんで。じわっと脚を胸元に引きつけて。脚を真下に伸ばして上体を起こそうとしたら、頭を押さえつけられた。
「手を抜くな。まだ行ける」
ナイスミドルさんの声。別の人が、あたしの足首を引っ張って水平の姿勢に戻した。
痛い。でも、助かった。ポニテをつかまれて、頭が水面から出た。大急ぎで空気をむさ

ぼる。
　ナイスミドルさん、けっこうやさしい。あたしの息が落ち着くまで、待ってくれた。
「息継ぎをするから、リズムが崩れるんだ。ノーブレストで行け」
　そう言って手をはなす。前言撤回。やっぱりサディストだ。
　ぷかっと浮いてても仕方ないので、ドルフィンキック（もどき）を再開。なかなか加速しなかったけど、行き足がつけば、それなりに進む。あと五メートルの白線が、ぼんやり見えてきたあたりで息苦しくなったけど。たしかに、息継ぎをすると、空気より水を飲むほうが多い。
　がんばれ、あたし。根性だ――なんて、スポ根ドラマのノリだけど。裸で縛られてる時点で、ＡＶになっちゃってるよ。
　五メートルの白線に到達した頃には、頭が締め付けられるように痛くなってた。身体の下を通り過ぎる白線が、よく見えない。最後の気力を振り絞って、キックを続ける。
　ドン……コンクリートの壁にしてはやわらかな物に頭をぶつけた。肩をつかんでヒップを押されて、あたしは立たせてもらった。メタボさんだった。

「はあ、はあ……」
　メタボさんの胸にもたれて、荒い息を繰り返すあたし。この瞬間、メタボさんの偏差値は五十五突破。
「よくがんばったね」
　バストをモギュモギュと揉まれた。偏差値急降下。
「よーし。もう一本だ」
　神田先生の非情な声が追い打ちをかける。
　指導に逆らっても体罰なんだから。あたしは無言で向きを変えて。今度こそ確実に強く壁を蹴った。
　中間ラインが見えてくる前に息が苦しくなった。だいたい、ふつうに泳いでもノーブレストは二十五メートルがぎりぎり。推進力の大半を生み出す手が使えずにまともにキックもできないんだから、その半分だって無理なのは自明。
　あたしは顔を水に浸けたまま、あたりを見回した。四人が前後左右を囲んでる。できれば助けてもらわずにすませたい。水を飲むのを覚悟で、気管にだけは入れないように気をつけて顔を上げた。
　意識しすぎると失敗する見本。空気と一緒に水も吸いこんじゃった。水の中で咳きこん

で、ボコボコと泡が逃げてく。もいちど顔を上げて――もっとひどく水を吸い込んだ。
　誰も助けてくれない。身体が沈んでく。胸が苦しい。駄目だ、水中で息を吸っちゃ駄目だ。
　パニック寸前で、あたしは立ち直った。さっきの手順で足をプールの底に着けて立ち上がった。
「課題をクリアできなかった。体罰だな。上がってこい」
　溺れる恐怖に比べたら、どんな体罰だってかまわない。あたしはプールの端まで歩いてって、階段を――上がれない。手すりをつかまないと足が滑る。
「手伝ってやろうか？」
　オタクさんが後ろに立った。
「お願いします」
　ちょっとでも善意を信じたあたしが馬鹿だった。後ろからふんどしの前後をつかまれて持ち上げられた。全体重が、もろに股間にかかる。
「痛い……」
　けど、おろしてとは言えない。ご機嫌をそこねたら、自力で梯子を上がらなくちゃいけない。それに――荒縄が食い込んだときの鋭

い痛みに比べると、クレバス全体を子宮に押し込まれるような圧迫感が、快感とはいわないけど切なさみたいな感覚につながってる。
　梯子を二段ほど登るとオタクさんはふんどしから手をはなして、ヒップを押し上げてくれた。
　プールから上がると、意外にも縄をほどかれた。だけでなく、ふんどしも脱がされた。オタクさんとメタボさんの二人がかりで、頭のてっぺんからつま先まで乾いたタオルで拭いてくれた。バストと股間を特に念入りに拭いてくれたのは、いうまでもない。
　そして、受虐待ちのポーズをとらされた。
「おまえには、積極的に補習を受ける気概が見えん。いやいや受けているのか？」
　神田先生が竹刀の先をあたしのお腹に強く押しつける。ぐうっとお腹が引っ込んで。あまり痛くはないけど、すこし吐き気がしてきた。
「どうなんだ？」
「いやいやじゃないです。悦んで受けてます」
　いやいやでないのは確かだけど、悦んでかどうかは微妙。でも、エッチに虐めてほしくて――なんて言えない。
「口ではなんとでも言える。態度で示せ」

「……はい」
　竹刀がすうっと下がって、股間をつっつく。「今から体罰を与える。悦んで積極的に補習を受けているなら、その姿勢を崩すな。声も出すな」
　うああ……やっぱりだ。クリトリスってよりは、股間を叩くんだ。姿勢を崩すなって、無理。悶絶しちゃう。でも、わかったなって、クリトリスをグリグリされたら、はいって答えるしかない。
　あれ？　先生の腕から端末が消えてる。そっとあたりを見回すと、五メートルくらいはなれて立ってるナイスミドルさんが嵌めてた。腕組みをして、こちらに向けてる。編集が終わったら、あたしもデータをもらいたい。一生の記念になる――なんて、アホなことを考えてるうちに、先生は竹刀を縄束に持ち替えた。
　ひええ。竹刀より痛そう。でも、叩かれるよか選択肢はない。いやだって暴れても、寄ってたかって身動きできなくされる。思いっきり泣き叫んでみようか。でも、嘘泣きってばれたら、もっと厳しい体罰だろうし。ほんとのほんとに心の底から絶対に厭ってわけでもない。怖いもの見たさっていうか。

先生の縛り方、手際がいい。つまり、ＳＭの経験が豊富。取り返しのつかないことにはならないって、先生を信頼してる。
あたしは開いた両脚を踏みしめて、歯を食いしばった。
「いくぞ！」
先生の右手が後ろへ引かれて。
ひゅうん……バシイン！
「……！！」
股が爆発したような、鋭くて重たい激痛。膣も子宮も尾底骨も背骨も、一瞬で粉砕されたような衝撃。
「あう、うう……」
膝が震えて腰が砕ける。立っていられるのが不思議なくらい。
「根性を見せたな。姿勢を崩していいぞ」
先生の声で一気に緊張がとけて。
「痛い……」
股間を両手で押さえて、柔らかい床シートに崩れ落ちた。
それから五分くらい、あたしはうずくまって呻いてた。先生たちは壁際のベンチに座って、あたしが苦しむ様子を眺めている。
「今日のプール実習は、これで終わりだ。これから反省会を開く」

　あたしが身体を起こすのを待って、先生が告げた。
　あたしは床に座禅を組まされた。胡坐に座って脛をクロスさせて、手で足首を持ち上げて膝に乗せる結跏趺坐ってやつ。足の甲が膝を曲げた部分に嵌り込むので、手を使わないとほどけない。股間は最大限にクパァ。なのに、両手は膝に乗せるから隠せない。掌を上に向けて影絵のキツネみたく指をくっつけて、それっぽく印を切る。
「目を閉じて。無念無想。絶対に声を出すな、身体を動かすな」
　ははん、読めた。
　目を閉じて三十秒もしないうちに。
「痛いっ……！」
　わかってても、いきなり乳首をデコピンされたら叫んじゃう。両手で胸をおさえて、上体を倒しちゃう。
　パシン！
　肩を竹刀で叩かれた。
「声を出すな。じっとしていろ」
　あたしはぶすっとして座禅の姿勢に戻った。すかさず左のバストを揉まれた。けっこうソフト。同時に乳首にも刺激。右のバストも、こちらは根元をつかまれて。鼻息がかかった

と思ったら、乳首をぱくっと咥えられて――れろれろ舐められた。左右の刺激が違ってて、それがひとつに合わさって、１＋１＝３みたいな快感。
「ん……」
　声が出かけて、ぐっと息を止めた。気持ちいいけど、物足りない。クリトリスも……
「ぎひいいいっ……！」
　反射的に腰をよじって、ますます痛みがつのる。目を開けて見下ろすと――クリトリスを抓られてる。
「痛い、痛い……やだ！」
　目の前の手首をつかんだけど。引き剥すどころか揺することもできない。それはすべて、自分でクリトリスを虐めることになる。
「この娘、どうしようもありませんな」
　お爺さんの声。
「無念無想養成ギプスを装着させましょう」
　神田先生、今度はベンチに置いてた紙袋から革バンドが組み合わさったような物を取り出した。ボディハーネスだと、ひと目でわかった。
　あたしは立たされて、ボディハーネスで拘束された。分厚い首輪を巻かれて。ウエストは太いベルトで、腹式呼吸ができないくらい

ギリギリと締めつけられた。ベルトの上の菱形の二つの太いバンドがバストを絞り出して首輪につながれる。両側のバンドは背中にまわされて、これも力まかせに締めつけられた。

ベルトの下から伸びてる二本の細いバンドが股間を割って、クレバスの中じゃなくてふんどしのときみたいに鼠蹊部に沿って後ろへまわされ、ふんどしとは違って二本に分かれたまま、ヒップと太腿のあいだのくぼみに沿って横へ引き上げられた。

腕は背中にねじ上げられて、首輪に直結した金属の手錠で拘束された。それから結跏趺坐を組まされて。股間のバンドでラビアが左右に引っ張られる感じで、ハーネスがなかったときより開いちゃってる。

背中をぐうっと折り曲げられてから、ベルトの両側についてるバンドで膝を縛られ、さらに首輪から垂れた鎖を脚がクロスしてる部分に巻かれた。座禅じゃなくて海老責めだよ、これ。

これで身体の動きを完全に封じられて。つぎは口。ゴムのマスクをかぶせられた。ただのマスクじゃない。口をいっぱいに開けないと咥えられない大きな突起がついてて、舌を押さえる仕組みになってる。声は出せないし、

ゴムが顔に密着してまったく息ができない。呼吸は鼻だけが頼り。それもハーネスのせいで、ちょっとしか息を吸えない。
　そして、最後にアイマスク。傷テープでまぶたをバッテンにふさがれてから、真っ黒な分厚いやつを着けられた。まるっきりの暗闇。
　耳をふさがれなかったのは、言葉責めのためらしい。
「おとなしくしてますな」
「ふつう、ここまでされたら気が狂ったように暴れるものじゃが」
「自縛して、跳び箱で開脚オナニーとか、ハードルを木馬がわりにまたぐような子ですからね。ほら、責めを期待して大淫唇が淫ら汁で、てかってますよ」
　え……？　神田先生に発見された日は、そんなことしてない。なんで知ってるの？？
　そんな疑問は、すぐに忘れてしまった。
「んんん……」
　誰かが、クリトリスをつまんだ。被虐への期待よりも恐怖が大きくてちぢこまっていたそこは、乱暴な愛撫に晒されて痛みを感じながらも、たちまち硬くしこった。
「んっ……！」
　きゅろんと皮を剥かれた。

「んん、んんんーっ！」
粘膜をじかにこすられて、鋭い痛みが尾底骨まで突き抜けたのに。痛みと同時に快感もあった。純粋に肉体の快感もあるけれど、男の人に乱暴に扱われてるという被虐の悦びが強い。こんなふうにしてマゾに馴致（こういう単語は、たくさん知ってる）されてくんだなと、納得。
別の手がバストを揉みしだく。揉むとか愛撫じゃなくて、でも、こねくるってほど乱暴でもない。わずかな肉体の快感と精神的な悦虐とが絡み合って。
あたしは、どんどん追い込まれてく。逝くってのとは方向が違う。
ちょこっと懺悔しとくと。飲酒の経験は、少しだけある。缶チューハイとかワインを大さじ二杯かそこら。パパの呑み残しだったり、背伸びした友達につきあったりで。頭がふらふらして、雲に乗っかってるような。でも、逝くのとは方向が違うし、もっと小さい。
それと同じ感覚が、酔っぱらうのよりは大きくて、逝く方向に近い部分もある。
「ふうん……」
鼻から漏れる呻きが甘ったるくなってると、自分でもわかる。

「んいっ！」
　三人目かな。アヌスをさわってきた。皺のあたりをなぞって……痛い！　指を挿れてきた。
「んん、んんんっ……！」
　あたしは上体を左右にくねらすしかできない。身体をそらしたら、指が突き刺さっちゃうし、前に倒したらますますアヌスを晒すことになる。
「まだ指導に逆らうとは、体罰が怖くないのか？」
「こういう娘は、叩いても効き目がありませんよ」
「肌の上にではなく、身体の奥に根性を注入してやるべきじゃな」
　ぎくっと……酔いが醒めた。けれど、頭のふらふらは、くらくらに高まった。これからなにをされるか、見当がつくどころじゃない。そしてあたしは――今日こそはと、期待してたんだし。その期待が、五倍になって実現するんだ。
「んんっ……！？」
　身体を前に倒されて、あたしは驚いた。けど、肩が床シートについたので、状況を理解した。四十五度以上に折り曲げられて、肩が

床についてるってことは、ヒップを高く突き出した姿勢になってる。座禅転がしってやつだ。マゾっ娘のあたしにはふさわしいロストバージンかも。
「んひっ……」
　べろんとクレバスを舐められた。気色の悪さと快感とがひとつになって、ぞくぞくっと背中を駆けのぼった。
「最初だからな、特別サービスだ」
　先生の息が粘膜をくすぐる。
　ぴちゃぺちょ、じゅる……
　舐めるだけじゃなくて、あたしの奥からエッチなお汁を吸い出す。吸い出して、膣口のまわりに塗りこめる。
「んふう……」
　膣口を舌先でちょんちょんとノックされて、完全に肉体的快感。でも、息苦しい。
「これだけ暖めておけばじゅうぶんだろう。いくぞ！」
　熱くて硬い感触が内側のラビアを掻き分けて、膣口にあてがわれた。
　挿入される、貫かれる、破かれる……と覚悟を決めて。
　ペチンとヒップを叩かれた。
「もっと力を抜け。それとも、痛いのが好き

か？」
　先生の声は苦笑していた。
　痛いのが快感に――なりかけてるけど。自分から求める気にはなれない。
　ふっと息を吐いたとき。
　ずぐうっと、刺し貫かれた。ぴきぴきっと、処女膜の裂ける音が、耳には聞こえなかったけど股間に響いた（ような気がした）。
「んんっ……んんんんん！」
　破瓜の痛みは、唇を横にイーッと引っ張ったときの痛さを百倍にしたようなものだって聞いたことがある。たしかに、そんな感じだったけど。裂けた膜が内側へ押し込まれるような不快感もあった。はっきりしてるのは、肉体的な快感はこれっぽっちもないってこと。これで『の子』が取れてオンナになったんだなあという感慨、いきなり座禅転がしで処女を奪われたっていう被虐感と甘い屈辱と妖しいときめき、見知らぬ誰かではなくて神田先生に捧げたっていう安堵感――そんなのは、たくさんあるけれど。
「んんっ……」
　ずにゅううううっと、ペニスを抜かれて。痛いし、身体の奥からめくり返されるような違和感。

ペニスが抜けきる前に、また押し込まれる。膜は破けてるはずなのに、まだ痛い。のは、当然かな。破けたってことは、そこが傷ついてる。傷口をえぐられてるんだもの。
三度目に奥まで挿れられたとき。先生のアンダーヘアがあたしのヒップに押しつけられるのを感じた。くすぐったくて、もぞっとヒップを動かした。ので、あたしが痛みに慣れたと判断したのかな。
ずっぷ、ずっぷ、ずっぷ――と、先生がピストン運動を始めた。
「んっ、んっ、んっ……」
痛くて呻くんじゃなくて、呻いて痛みをまぎらわしてる。それが五分くらいも続いたかな。
「出すぞ。子種を受け取れ！」
え……？　子種？　もしかして、ゴムを着けてくれてない？　やだよ、妊娠は。
「んんんっ、んーっ！」
あたしは腰をよじってペニスを抜こうとしたけど、先生を刺激しただけみたい。いきなりピストン運動が倍速になって。ペニスがびゅくびゅくって痙攣したのが膣口に伝わって。先生の動きが止まった。
「ふう……まぞみの初めては、俺がいただい

た。初々しくて良かったぞ」
　あたしは、それどころじゃない。妊娠したら、どうしようって――そればかり考えてる。サディストはサービスのＳだなんて、絶対に嘘だ。●学生に中出しだなんて、自分勝手もいいところ。
「こちらの初物は、私がいただいてよろしいかな？」
　ナイスミドルさんの声が聞こえたと同時に、アヌスを指でくじられた。
　冗談！　ロストバージンして、すぐにアナルバージンまで？
　でも……四人の姿を見た瞬間から、そんな予感もしてた。たぶん、お口のバージンも奪われ……ちょ、ちょっと待ってよ。よくよく考えてみたら。小二のときの唇チョンチョンは別にして、あたし、ファーストキスもまだだった。誰かさんのオチ●チ●がファーストキスの相手だなんて、すごくみじめ――なんて思うと胸が苦しくなるのは、きっとハーネスのせいだ。
「んんっ……！？」
　アヌスに冷たい感触。冷たいんだけど、なんだかねっとりしてて、すぐになじむ。これって、ローション？　それともワセリン？

フェラチオのことは、おいといて。しょうがないので、アヌスは覚悟を決めた。まな板の上の鯉、床シートの上の座禅転がし。
潤滑剤を塗りこめてる指が、ぐにゅうっと中まではいってきた。痛くはない。実はローターを挿れたことがある。いけないことをしてるっていう背徳感で軽く逝っちゃったけど、快感はそれほどでもなかった。
うう、二本目の指が……痛い！　挿れただけじゃなくて、ぐりぐり回してる。しばらくのあいだ、ほぐすっていうか拡張するっていうか、そんなふうに入口を掻きまわしてから、指が抜かれた。
「浣腸を忘れてましたね」
抜いた指をあたしの背中で拭いてる。
「あとで洗うとしましょう。やはり、ゴムは味気ないですから」
ナイスミドルさんの声が背後に近づいて。アヌスに圧力が加わった。
ぐううっとアヌスが押し込まれる。バギナとは違って、鋭く引き裂かれるんじゃなくて重たい痛み。
「いきむな。リラックスして、ゆっくり深呼吸を続けろ」
なこと言われても。ハーネスで締めつけら

れて身体を折り曲げられてて、満足に呼吸もできないのに。それでも、意識してゆっくり呼吸してみる。
　すううううう、ふううううう。すううううう、ふううううう……ひぎい！
「んんーっ！」
　めりめりとアヌスを押し割られる灼熱感。と同時に、お腹の奥まで異物を押し込まれる圧迫感。けれど。
「んふううううう……」
　いったん挿入されちゃうと、痛みがやわらいだ。今も、すごく熱い。お腹の中に不快感がわだかまってる。でも、どこも切れたり破れたり（たぶん）してないから、バギナよりは楽だ。
　きひい……ずぽっと引き抜かれると、亀頭の太くなってる部分が入口に引っかかって、瞬間的だけど痛みが倍増する。
　ぐぎい……あらためて挿入されるとき、最初と同じ灼熱と激痛が甦った。
　ナイスミドルさん、先生よかサディスト。先生は穴の中でピストンしてくれたけど、この人は一回ずつ完全に抜いてから挿れてくる。そのたびに、最初と同じ激痛。バギナと違って、痛みに慣れるってことがない。

「んんんっ、んんんっ、んんん！」
　呻いてるんじゃなくて、悲鳴が鼻から吹き出してる。あまりの痛さに泣いてしまった。
「んひっ……ひっ……」
　涙で鼻が詰まって、じゅるじゅると鼻汁をすすりながらしゃくりあげた。
「ふふん。マゾビッチかと思えば、なかなかどうして。可愛げがあるじゃないか」
　泣いてるのがわかっても、手加減するどころか。あたしの腰を両手でつかんで、ますます激しく突き刺してくる。
　射精の瞬間のペニスの痙攣はわからなかった。気がつくと終わってた。けど、アヌスの痛みは尾を引いていた。ロストバージンよりアヌスのほうが、ずっとつらかった。
「残り物には福がある――かな」
　今度はお爺さんだ。あたしはポニテをつかんで引き起こされた。髪の毛が痛いなんて、もうどうでもいい。とにかく、早く終わってほしい。
　マスクがはずされた。舌を動かせるようになった。唾液まみれになっていた口のまわりが空気に触れて、かえって気持ち悪い。なんて気にしてられない。ハーネスでお腹も胸も圧迫されながら、あたしはハアハア息を吸っ

た。
　その半開きになってる口に、ぐぼっとやわらかな棒を突っ込まれた。アンダーヘアが鼻の穴をくすぐって、くしゃみしそうになった。
　アポクリン腺だっけ？　男の人の腋のような臭いが鼻を刺した。生理的に厭なのに、エッチな気分を誘う臭い。ふんどしだけで風通しがよかったからか、それとも男の人ってそういうものなのか、女のマン臭みたいな濃厚な獣の臭いはしない。
　そのせいかな。亀頭のきゅろんとした舌ざわりが、そんなに不快じゃなかった。でも、ちょっとしょっぱい。
「噛むんじゃないぞ。噛んだらメコスジに鞭だぞ」
　メコスジ？　初めて聞く単語だけど、意味はわかる。あんな痛いのは、絶対に厭。あたしは、大きく口を開けた。
「まじめにやれ」
　本気（だと思う）で叱られた。動画とか思い出して――口を開けたまま唇をすぼめた。
「歯をマラに軽く当てろ。顎に力をいれるな」
　むずかしいよ。
「ぼけっとしてるんじゃない。舌を動かせ」
　て言われても。ＳＭ系やオナニーだけじゃ

なく、ＳＥＸテクのサイトも詳しく見とくんだった。
「大久保さん。こいつには、まだなにも仕込んでないんです。ただの穴として使ってやってください」
　すごい言われかた。けど、大久保さんのほうがすごかった。
「そうですか。それじゃ遠慮なく」
　両手であたしの頭をつかんで。ゆっさゆっさと前後に揺すぶり始めた。同時に自分の腰も動かしてるんだろう。ペニスが喉の奥まで突き当り、上あごをこすりながら引き抜かれる。
「んぐ……やべべ」
　やめてって言ったつもりだけど、口をふさがれて声がくぐもる。ちゃんとお願いできても聞いてもらえないんだろうけど。
「舌を突き上げろ。マラを舐めるくらいはできるだろう」
　早く解放してもらいたいので、言われたとおりにする。頭を揺すぶられてめまいがするし、喉の奥に異物を突き立てられて吐き気もこみあげてく　る。
　フェラチオって、女性から男性への奉仕だと思ってたけれど。これは、あたしの意志は

ほとんど関係ない。これって、イマラチオだっけ？　いや、イラマチオ？　どっちだっていい。ほんと、神田先生の言うとおり、穴として一方的に使われてる。
　肉体的には苦しいけど、精神的には楽かな。自分からエッチなことをするんじゃなくて、男の人にエッチなことをされてるんだから。つぎはどうしようなんて考える必要がない。
「むぐ……？」
　口の中のペニスが、急に太くなって硬さも増した。と感じた直後。どくどくっと、喉の奥に熱いものが叩きつけられた。
「うく……ごふっ」
　反射的に息を止めたけど、むせて。顔をはなそうとしても、頭をつかまれてるから逃げられない。
「飲め。痛い思いをしたくなかったら、一滴残らずゴックンしろ」
「ぐ……んぶ」
　口の中に、漂白剤みたいな臭いが広がる。粘っこい感触が喉に絡まって、それに舌の動きをペニスが邪魔して、なかなか飲み込めない。口の中に唾を溜めて、なんとかゴックンできた。でも、まだ頭をつかまれたまま。
「尿道に残っている精液も吸い出せ」

どうしていいかわからないけど、ペニスを極太のストローだと思って、吸ってみた。
じゅぶぶぶぶ……ストローと違って表面が（すこし）デコボコしてるせいかな？　唇とペニスとのすきまから空気がはいってきて、卑猥な音がする。
亀頭の先っぽから、どろっとした滴が吸い出されて、舌にこびりついた。ねばっとしてるけど、あんまり味はなかった。一滴だけなので、漂白剤みたいな臭いも薄い。でも、舌ざわりはえぐい。それも唾と一緒にゴックンして。
大久保さん、やっと頭から手をはなしてくれた。
三つのバージンを一度に奪われて。予想も覚悟も超えた出来事に呆然自失。バギナもアヌスも、まだずきずき痛い。口の中には精液の感触がべったり残ってる。
これで三人、あと二人。どの穴を使われるんだろう？　先に正解を言っとくと、全部だった。
誰かが前に立った気配。
「つぎは俺の番かな。ケチャマンに突っ込むのは初めてだ」
メタボさんの声。

「早くすませてくださいよ。僕、もう暴発寸前ですよ」
「いっそ、二人同時が面白いでしょう。いや、それよりも……」
　神田先生がアイマスクをはずしてくれた。海老責めに拘束してる鎖とバンドをほどいて、結跏趺坐をほぐしてくれた。でも、ボディハーネスと後ろ手錠は、そのまま。
　どんなときでもレディー（もう女の子じゃないもん）はたしなみを忘れちゃいけないから、膝を揃えて立てて体育座り。
「前は安田さんに譲るとして。中くんは、どっちがいい？」
「ええと……アナルは未体験なんで」
「名詞はエイナスじゃ。間違うくらいなら横文字なんか使うな。ケツマ●コと言えばええ」
「では、安田さんが牝マ●コ、俺がロマ●コということで」
　えええっ！？　てことは、４Ｐで三穴同時？　一時間前には処女だった娘に、なんて鬼畜なことをするのよ！
　両方の痛みが同時で、しかもイラマチオの屈辱まで。怖い……でも、どこまで無茶苦茶されるんだろうって、子宮がじいんと痺れてくる。

ゲームで、ハイレベルの男パーティーに引き回される新米娘（防具は無しで、可能ならマッパ）を連想しちゃった。強いモンスターに挑んで、新米娘はあっさり殺させといて、あとのベテラン男性陣が敵を全滅させる直前に呪文で蘇生させて、経験値をガッポリ。敗北エロのないゲームは、そういう遊び方をするんだよね、あたし。けっこう濡れちゃう。今のあたしは、その新米娘の立場。

メタボの安田さんが、ふんどしをほどいて、ごろんとあお向けになった。すでにペニスはカチコチにそびえ勃っている。もしかして、騎乗位？

もしかしなくてもだった。先生にバストをつかまれて、安田さんをまたいだ。

「スクワット、始め」

いきなり体育補習が復活した。膝を曲げて腰を落としていって。自分の下腹部から目をそむけたくなる。クリトリスの上まで血まみれになって、太腿には赤い血と白い精液とが垂れている。

その血まみれの股間を垂直に勃ったペニスの頂点へ降ろしていく。ペニスをラビアで包み込んで――そこからがうまくいかない。正確な膣口の位置なんて知らないし、なんとか

先っぽが合ったかなって腰を沈めると、にゅろんとペニスが逃げてく。ＡＶだって、女優さんは片手でペニスを握ってる。手を使わずにだなんて、レベル１のあたしにできるわけがない。
先生はあたしの悪戦苦闘を見物するつもりだったのかもしれないけど、安田さんにしたら蛇の生殺しもいいとこ。
「ほら、ここだ」
左手でペニスの根元をつかんで右手でラビアを掻き分けて、膣口にあてがってくれた。
ので、ヒップが安田さんの太腿に当たるまで膝を曲げた。あれ？　あんまり痛くない。こんな短時間で傷が治るはずはない。傷口を他人に消毒してもらうより自分でするほうが痛くないのと同じ理屈かな。
ピストン運動をしなくちゃ。ゆっさゆっさと腰を上下させたけど、十回と繰り返さないうちに膝が痛くなってきた。あ、そうだ。ＡＶ女優さんは、たしか……床に膝をついて、腰を動かしてみた。ずっと楽だ。
でもすぐに、自分で動く必要がなくなった。というのも。肩を押されて前倒しにされて、またポニテをつかんで（痛いってば）中途半端な姿勢にされちゃって。

「若さが羨ましい。それくらい硬ければひと息に貫けるじゃろう」
　先生やナイスミドルさんとは違って、まっ赤に焼けた鉄棒みたいに熱くて硬いペニスがアヌスに押し当てられて。力まかせに突っ込んできた。
「はあああああーっ……」
　すこしコツを覚えたので、ゆっくり息を吐いて迎え挿れた。うぐ……でも、やっぱり痛い、熱い。
　それに、前をすでにふさがれてるから、お腹の中がパンパン。あたし、わりと規則正しくお通じがあるけど、初潮の二か月くらい前に本格的な便秘に悩まされたことがある。お腹がすごく張って苦しかった。そのときよりも苦しい。てことは、ペニス二本は十日分のウンチより体積が大きい？
「なんだ……きついのは入口だけで、中はガバガバですね」
　オタクの中さん、がっかりしたように言う。あたしは、すごく腹を立てた。ガバガバだなんて、女にとっては最大の侮辱だよ。
「アヌスなんて、そんなものだよ」
　先生が目の前に立った。ふんどしも脱いで全裸。想像してたよりも引き締まってて、お

腹なんか三段に割れてる。そして、初めて見る先生のペニス。ていうか、真正面からおとなの男性の生ペニスを見たのは、これが初めて（メタボさんのは見下ろしただけ）。
　無修正ＡＶより大きい感じ。もっとも、無修正は全部が外人だから、体の大きさとの比較で先生のほうが大きく見えるだけで、絶対値は逆転するかもしれない。けれど、ＡＶに粗チンは出演しないから、先生は偏差値的にエリートなんだろうと思う。
　形も、たぶんエリート。松茸そっくりに傘が開いてる。
　その松茸が唇に触れて。あたしは、あーんと大きく口を開けて頬張った。
　先生が大久保のお爺さんみたく、両手で頭をつかんで。オタクさんが、やっとポニテをはなしてくれた。
「中くんがペースメーカーだ。好きに動きなさい」
　それじゃ遠慮なく。そう言うと、激熱超硬ペニスが、がっしがっしとピストン運動を始めた。その動きに押し引きされてあたしの上体が前後に揺れると、バギナに挿入されてるペニスがアヌスとは反対向きにピストンする。膣と大腸とが逆向きにゴリゴリこすられて、

不快なのかなんなのか。すごい違和感。快感でないことだけは、はっきりしてる。
　しかも、先生がリズムに合わせて頭を揺する。
「歯を立てるな。唇で歯を包んで、強めに顎を閉じろ」
　大久保さんとは逆の指示。フェラテクにも、いろいろあるんだ。
「駄目ですよ。いくら竿を締めつけられても気持ち良くないです」
　贅沢を言うな。あたしなんか、熱くて痛いのを必死で我慢してるんだ。
「入口でカリクビを刺激すればいい。完全に抜いてから、また挿入してみろ」
　ずぼっと、アヌスからペニスが引き抜かれた。すぐに、突き刺す勢いで挿入してくる。
「おお、すげえ。これは病みつきになります」
　ずぼっ、ずぶっ……ずぼっ、ずぶっ……抜かれるときは痛みが薄れるけど、突っ込まれるときは最初と同じくらい痛い。そして。あたしが痛ければ痛いほどオタクさんは気持ちよくなる――これが、ＳＭのほんとの姿だと思った。
　――３Ｐが終わっても、あたしは解放してもらえなかった。

跡始末もしてもらえないまま、今度はナイスミドルさんが正常位でバギナを犯して、それから先生とメタボさんがアヌスとイラマチオ。その途中で鹿間さんが、体育館の工事が終わったと言いに来て、輪姦には加わらなかったけど、しっかり見物してから出てった。

男の人は中休みを取りながら交替するけど、あたしは五分と休ませてもらえない。すこしだけ休ませてくださいってお願いしたら、ハーネスでくびり出されたバストを竹刀で四発も叩かれた。いっそ気絶してしまいたいのに、バギナもアヌスも、ずきずきひりひり。激痛が意識に突き刺さってくる。

あたしは、泣きながらお爺さんの相手をさせられた。お爺さんは『松葉崩し』っていうアクロバティックな体位で腰を痛めて、ざまあ見やがれ、でもしっかり中出ししてくれた。先生とナイスミドルさんが向かい合って座った上にあたしが乗せられて、ケツマ●コと牝マ●コの二本刺し。二人がかりであたしを上下に揺すぶって、タイミングを合わせて同時中出し。

それで、やっと終わってくれた。ボディハーネスをはずされて。ぴくりとも動けず床に倒れてるあたしを先生が抱き起して、血まみ

れの股間を脱脂綿で拭いて、軟膏を塗ったタンポンみたいなのを前後に挿入してくれた。抗生物質と軽い麻酔剤が配合されてるとかで、挿入して五分もすると痛みがずっとやわらいだ。

それから十五分くらいかな。先生はあたしを胸に抱きしめて、ずっと髪を撫でててくれた。性感帯への悪戯とかはなくて、ただ髪の毛だけ。初めてを捧げた男性にやさしくされてるって思うと、しんみりと幸せな気分。

だけど。これって飴と鞭の調教テクニックなんだろうと勘繰っちゃって、恋愛気分とは方角が違う。ご主人様に甘えるペットの気分かな。

そして最後に、素敵なプレゼントをもらっちゃった。それは、オレンジ色のパッケージで封印された二粒の錠剤。

「七十二時間以内に服用すれば避妊できるアフターピルだ。寮に帰ったら、忘れずに呑んでおけ」

ほうーっと、あたしは深い大きな安堵の息を吐いた。股間を鞭打たれるよりも、溺死寸前まで泳がされるよりも、傷ついた性器に挿入を繰り返されるよりも、ずっとずっと恐れていた悪夢。その心配がなくなった。先生は、

ちゃんとあたしのことを考えてくれてたんだ。神田先生になら、どんなひどい体罰やセクデラをされても安心だ。
「先生……ありがとうございます」
　あたしは先生の胸に顔をうずめた。
「今日はがんばったな。つらかったろう」
　先生は、もいちど髪をゆっくり撫でてくれた。そして、あたしを震えあがらせた。
「明日は、もっとつらいぞ」

３．緊縛水泳

課外補習が一日だけで終わるとは思っていなかったけど。土日ぶっ通してのは、まいった。

学園は短大のほかはまとめて郊外に建てられていて、街へ出るには三十分おきの学園バスに乗るか、私鉄の駅まで二十分歩くか、とにかく面倒。しかも制服着用が義務付けられてるので、健全な場所でしか遊べない。

だから、あたしが街へ出るのは月イチくらいなので、時間的には問題ないけど。二日続けて責められるのは厳しい。

でも、行かなきゃ。昨日の、補習はともかく根性注入てのよりつらいとすると、いったい何人に輪姦されるんだろう。昨日は、たしか牝マ●コ（すごい卑猥な表現。自分では二度と使わないようにしよう）に六回とアヌスが四回でオーラルも四回。風俗嬢まっ青。まだ、前も後ろもずきずきひりひりで、あたしはしょっちゅうあたりを見回してる――てのは、すごいガニ股になってるから。

寮から学校までは徒歩七分。正門で入構簿に昨日と同じ『図書室』って書いて。

鹿間さんは神田先生とグルだけど、まさかガードマンさんは違うだろうから、昨日と同じに校舎を経由して体育館へ行った。ガードマンさんの詰所から死角にはいってからは、ガニ股全開。日曜は部活も全休で、学園にいるのはガードマンさんと鹿間さんと、神田先生（と、コーチ？）だけのはず。

神田先生は昨日と同じように、プール階の手前の踊り場で待っていた。けど、いつものジャージ姿じゃなくて、まっ赤な競泳用のブーメランパンツ。フェラしたときていうかイラマチオされたとき、すごい剛毛だなと思ったけど、極小の布地に隠れるくらいの面積だったんだ。それとも、夕べのうちに処理したのかな？

まっすぐプールへはいって。

「……？」

そこには、二人の人物が待っていた。ひとりは、ナイスミドルさん。こちらもふんどしじゃなくて、黒のスパッツ水着。

もうひとりは、●校生くらいの女の子。こんな場所にいるんだから『の子』じゃないと思うけど。ショートヘアでボーイッシュな人。ヘソ出し乳首ポチのＴシャツと、超ローライズでＶレグのホットパンツ。どんだけローラ

イズかっていうと、ホットパンツの前ボタンが恥丘の盛り上がりに乗っかってるし、後ろを向いたらたぶん半ケツなんじゃないかな。
「紹介しておこう。おまえの大先輩の長尾知子。こちらの長尾さんの、まあ奥さんだ」
「奥歯に物がはさまったような言い方だな。戸籍上は配偶者だが、ようするに私の牝奴隷だ。一年前までは、神田くんの生徒だったがな。おい、知子」
　知子さん、ナイスミドルの長尾さんにうながされて（けしかけられて？）、あたしに近寄ると、いきなりハグ。で、キス。
「きゃ……」
　突き飛ばしたら、後ろから先生にヒップを叩かれた。
「こら！　先輩の挨拶を、きちんと受けろ」
「でも……なぜ、この人がここにいるんですか？」
「まず、挨拶を受けろ。おまえからも、挨拶を返すんだぞ」
　で、あらためて抱き合ってキス。うわ……舌を挿れてきた。あたしの舌を絡め取ったり、歯の裏側を舐めたり。ディープキスってやつ。さり気なくヒップも撫でられた。
「シイコ……知子は、今日マゾミが受ける特

訓を二年前に受けている。手本を示させるために、長尾さんに連れてきていただいたんだ」
　先生、ちょっと不機嫌。肌を許した人（うわ、古風）だもの、なんとなくわかる。
　先生と鹿間さんとの会話から、あたしが初めての生徒じゃないとは、わかってた。きっと知子さんも、一年前までは課外補習を受けていたんだろう。そして、先生としては不本意だったけど、ナイスミドルさんに譲ったか寝取られた。そう考えれば、先生の不機嫌に辻褄が合う。
「神田くん、そんなことはどうでもいいだろう。主人の意図を、いちいち牝奴隷に説明する必要はない」
「あたし、奴隷じゃありません！」
　さすがにムッとなって、あたしは声を尖らせた。
「奴隷ではないが――縛られて陶然となるマゾで、先生の命令には絶対に逆らえない特別補習生だな」
　先生が、後ろからあたしの肩に手を置いた。
「知子のときも、そんなことを言ってたな。甘やかすとつけ上がるぞ」
「甘やかしているつもりはありませんがね。おい、素っ裸になれ」

とんと肩を突かれて、前へ押し出された。
「知子、おまえも脱げ」
「はい、旦那様」
ふうん、旦那様かあ。上下関係は明らかだけど、夫婦だったら、人前でそう呼んでも不自然じゃないね。
知子さん、ストリップショーみたいに身体をくねらせながらＴシャツを脱いで、ぱあっと放り投げた。腰をグラインドさせながらホットパンツを下ろして、片脚だけ抜いて上体を反らせ、ブリッジの姿勢になってホットパンツを蹴り飛ばした。それが、ちゃんとＴシャツの上にぱさっと落ちる。調教済って単語が、頭に浮かんだ。
「ええーっ！？」
あたしが素っ頓狂な悲鳴をあげたのは。ブリッジから立ち上がった知子さんの股間にヘアがなかったからじゃない。桜の花みたいな模様が恥丘に描かれていたからだった。いや、描かれてるんじゃない。肉の盛り上がりがそのまま輪郭になってる。まさか、焼き印？
「ほう、型崩れせずに安定しましたね」
神田先生が、そこを指でなぞった。知子さん、わざとっぽく腰をくねらせた。
「不可逆な人体改造は趣味じゃありませんが、

ちょっと羨ましいですね。なにしろ、この娘にしても、いずれは親元に帰さねばなりませんから」
　あたしは信じられない光景を目の当たりにしてショックを受けている。そりゃまあ、全裸の女の子が体育教師にエッチな補習を受けさせられてるってのも、信じがたい光景かもしれないけど。この人体改造は、あたしの妄想のはるか上をいってる。
「おい、マゾミ」
　おまえも脱げと先生に言われて。知子さんと色気を張り合う気になれるはずもなくて。昨日と同じ色気のない脱ぎ方で、ぱぱっと全裸になった。今日は気合をいれてノーブラノーパンで来たっていうのに、誰も褒めてくれないし辱めてもくれない。
　あたしたちは二人ならんで立たされた。
　で、スマホからテレビ体操の音楽（台詞付き）が流れて、全裸体操。竹刀での指導とかはなかったので、あたしは適当に。ところが、知子さんは気合二百パーセント。テレビのお姉さん以上に大きく身体を動かして、うっすら汗がにじんでる。根っからの露出好きなのか、手を抜くと旦那様からお仕置きされるからなのかしら。

水泳前のストレッチ体操は省略で。
「ドルフィンキック養成ギプスというのは、かなり苦しいですが」
先生が手にしているのは、昨日の白い縄。たぶん木綿と化繊の混紡――ではないと、後日に教わった。二種類の化繊の混紡で、吸水性がないから水に濡れても締まったり弛んだりしなくて、水責めにうってつけだとか。
長尾さんも、先生から同じ縄を受け取った。
で、それぞれの牝奴隷や特別補習生を縛り始める。
最初に腕を背中にねじ上げられて、二重にした縄で手首を十文字に縛られた。それからバストの上下に縄を巻かれて、腋の下で絞られる。別の縄で手首をさらに引き上げられて。肩を左右にまたいで首の下に結び目が作られ、バストの谷間で上下の縄が絞られたとこまでは昨日と一緒だけど、今日は縄がずいぶん余ってる。
「痛い……」
バストをわしづかみにされて縄の間から引っ張り出されて、付け根より中間が膨らむ形に整えられた。
先生が余った縄の途中に結び目をひとつ作って、股間に当ててクリトリスの位置にふた

つ目の結び玉。そのすぐ下に、今度は大きな結び玉を二つ作った。昨日のふんどしの布で作ったのより大きい。

この縄、毛羽立ってないし肌ざわりがやわらかだから、荒縄と違って気持ちいいだろうな。あ、でも――ドルフィンキックって言わなかった？　結び玉を食い込ませて腰をうねらせると、角オナ強烈バージョンで逝っちゃって溺れちゃう。助けてくれるよね、先生？

縄を股間にとおされるときは、言われなくてもすこし脚を開いた。先生の指があたしをクパァして、ピンポン玉くらいの結び目（それも二連！）をラビアの中に埋め込んだ。

尾底骨の上でまた結び目が作られて上へ伸ばされ、折り曲げられた肘の高さにまたまた結び目が作られてから、短くなった縄尻は左右に分けて肘に留められた。

知子さんはどんなふうに縛られてるかなと、うつむけた顔（縛られると、自然とうつむいてしまう）を横に向けると――あたしとまったく同じだった。バストがあたしより大きいから、付け根をくびられたのが強調されて、ゴムボールを胸に貼り付けたみたいになってる。それは負けたけど、縄目の美しさでは勝ってた。

てことは、つまり。ＳＭでは、長尾さんは神田先生のお弟子さん？　でも、ふたりとも手際がいい。プロの縄師に習ったんじゃないかな。とすると、きょうだい弟子？
なことを考えてるところへ、短めのが二本まとめて登場。背中の縦縄に一本ずつ結びつけられて左右へ引っ張られる。結果、結び玉がクレバスに食い込む。縄は前へまわされて縦縄に絡められ、また後ろへ引っ張られる。うわあ、きれいな菱形。なんて感心してるときじゃない。
「くうう……きつい。すこし緩めてください」
食い込むなんてもんじゃない。結び玉がバギナにめり込んでくる。縦縄の結び目がクリトリスを圧迫する。
もちろんあたしの嘆願は無視されて、縄は目いっぱい引き絞られたまま後ろで結び合わされた。
圧迫を緩めようと思えば、できないことはない。縦縄の最後は左右に張った肘に留められているから、肘を脇に引きつければいい。けれどそうすると、重ねて縛り合わされた手首が押し上げられて、肩が痛い。
これで終わりかと思ってると、さらに縄。ベンチに置いてあるボストンバッグ。どんだ

け縄を詰め込んでるんだろ。
　あたしたちは、立ったまま両脚をそろえて――膝の上と足首とを、それぞれ十文字に縛られた。
「こうしておけば、キックのときに脚がばらけないからな」
　ほんとに、このまま泳がされるんだ。
　最初に知子さんが、二人に抱えられてスタート台に立たされた。中央寄りの六コース。それから、あたしが三コース。
「二十五メートルをドルフィンキックで泳げ。十本ワンセットだ。息継ぎをしてもかまわんが、失敗してもすぐには助けてやらんぞ」
　昨日の失敗で懲りているけど。ノーブレストで向こうまで行き着けないのは確実。ええい、飛び込んだ勢いでなんとか――ならないだろうなあ。
「それじゃ始めるぞ。ヨーイ……」
　先生、いつの間にかホイッスルを首からぶらさげてる。
　あたしは膝を曲げようとしたけど、縄が邪魔というかきつく締まってくる。なんとか飛び込みの姿勢に……うわっと。手でバランスをとれないから、前へ倒れかけた。
　ピッと短いホイッスルで、スタート台の縁

を蹴った。
　バシャッ……頭から水に飛び込んで。潜っているうちにドルフィンキックを始めたけど、やっぱり昨日と同じ。腰を上下させると、快感というか強烈な刺激が股間から尾底骨経由で背骨を駈け上がって、身体を動かせなくなる。そして、膝を縛られてるのが思ってたより厳しい。曲げると筋肉が膨らむので、きつく締めつけられる。強く蹴るのも難しい。
　五メートルラインを越えてすぐに身体が浮かび上がって、行き足も止まりかける。
　あれ……？　右斜め、ずっと前のほう。知子さんの脚が、水をきれいに蹴ってる。蹴るたびに泡が立ってるから、ちゃんと推進力が発生してて――ぐんぐん前へ進んでる。
　負けるもんか――とまでは思わないけど。同じように縛られてて、こんなに差がつくとみじめ。
　股間の刺激は（できるだけ）無視して、大きく脚を動かした。でも。
　バッチャン、バッチャン……まるで、ちっちゃな子供の水遊び。プールの底を見てると、すこしずつは進んでるんだけど。
　中央ラインがかすかに見えてきたところで、完全に息があがった。

こうなったら――あたしは思いきり上体を反らせてから、頭を下へ突っ込んだ。
ぶくぶくぶく。息を吐いて、さらに身体を沈める。やり直しのきかない一発勝負。プールの底ちかくで身体を起こすと、つま先がコンクリートにふれた。ぐっと膝を曲げて。
力いっぱい、斜め後ろに床を蹴った。
ざばあっ……バストの上あたりまで水面から飛び出た。大急ぎで息を吸いこむ。うまくいった。床を蹴った反動で行き足もついた。
これをもう一回繰り返してゴールイン。
「今のは一本に認めんぞ。途中で立ったのと同じだ」
言われるかもしれないとは思ってたけど。でも、ほかに方法がないんだもの。
「だって、こんなに雁字搦めに縛られて泳ぐなんて、絶対に無理です」
「そうか？　おい、知子。お手本を見せてやれ」
「はいっ」
ほんとに体育の授業を受けてるみたいな元気な声で返事して。知子さんはザバアッと水面に身を投げた。
バシャ、バシャ、バシャ……腰を突き上げ、沈むタイミングで足を蹴り上げ、その反動で

腰を突き上げる。ゆっくりだけど、きれいなドルフィンキック。五回に一回は、顔を上げて息継ぎまでしてる。
「ターンして戻ってこい」
　壁の手前でくるんと身を丸めて沈んで、クイックターン。股間の刺激が気にならないんだろうか。
　でもなかったみたい。こっちに泳ぎ着いて立ち上がった知子さん。顔がまっ赤なだけだったら激しい運動のせいかもしれないけど。目がとろ〜んとしてる。その目をプールサイドへ向けて。
「旦那様、逝ってもいいですか？」
「許す。逝き方もマゾミに手本を見せてやれ」
「ありがとうございます」
　知子さん、ばちゃっとあお向けになった。ごぼっと全身が水に沈んで、下腹部が最初に浮かんできた。くいっくいっと腰が上下に跳ねて。三度目に突き上げると、びくびくびくびくっと何度も痙攣した。ごぼごぼっと泡が水面で弾けて、身体が沈み始める。
　先生と長尾さんが、ほとんど同時に足から飛び込んだ。すぐ助けるのかと思ったら、ゴーグルを着けて水中で観察してる。
　二十秒くらいして。知子さんの頭が水面に

出た。
「はあああ、ああん……」
　感極まった深呼吸。
　忙しいなあ――というのが、あたしの感想。逝ったら五分くらいは余韻に浸っていたいよね。水中では、それが許されない。
「知子は、あと七本。マゾミは十本まるまる残っているぞ」
　そうだった。二十五メートルを十本て言われてた。プールの底を蹴って顔を上げると一本にカウントしてもらえないとなると、絶望的。でも、今の様子を見てたら、あまり怖くなくなった（かなあ？）。がんばるだけがんばって溺れたら、きっと助けてもらえる。
　知子さんは、もう泳ぎ始めてる。
　あたしも――両足ケンケンで壁際に行って、素早く（ゆっくりしてると、身体が壁からはなれる）膝を曲げて。水中で壁を蹴った。
　ぐうんと加速して、体が浮くのを待つ。腰を使ったキックじゃないと水中で推進力は生まれないって、さっきので学習してる。
　五メートルラインの手前から、バチャバチャ開始。あまり息が苦しくならないうちに、ぐんっと反動をつけて上体を起こして――ちょびっとだけ息を吸えた。余裕で中間ライン

を通過して、これならいけると思ってたら。縛られた脚を無理に動かしてるので、消耗が異常に早い。ちょびっと息を吸うくらいでは追いつかず、頭がガンガンしてきた。キックの勢いもおとろえてきて、最後の五メートルラインが見えているのに、なかなか近づかない。

もうギブアップして、股間に鞭打ちだろうと、もっと厳しい体罰だろうと、そっちのほうがましだとさえ思えてくる。でも、ここまでがんばったんだから、もうチョイ――なんてスポ魂になったりを繰り返して。

ゴールイン！

「はあはあ……はあはあ」

泳げた。二十五メートルを泳ぎきった。荒い息を吐きながら、達成感に浸る。

息がととのって、心臓もバクバクからドクドク（百二十以上）までは落ち着いたので。叱られる前に、自主的にスタート。

スポ魂モードとエッチモードは真逆。だから、だいじょうぶかな？　腰を上下させて水流を作って……くうう。感じ方は減ってるけど、そのぶん、圧迫される痛みが強調されて。一回や二回はいけるけど、たとえ十メートルだけでも続けられそうもない。

知子さんはすごいなあって、あらためて尊敬――していいのかな？　あたしが耐えられない苦痛を乗り越えて、どんどん泳いでる。あ、知子さんはエッチモードの真っ最中かも。あんだけ壮絶な逝きっぷりだったもの。

どっちにしても。股間を刺激されながらの本格的なドルフィンキックなんて、あたしには無理。

あたしが三本目を泳いでるうちに、知子さんは七本を泳ぎきって、最初の三本と合わせて課題をクリア。今度は水から出してもらって、床の上で反りかえって。

「あああああ……逝きます。オサネ、行きます。オマ●コ、逝っちゃいます！」

聞いてるほうが恥ずかしくなる卑猥な単語を連呼してる。だけど、オサネとかオマ●コとか、古風ていうか男っぽい言い方。そう言えって、調教されてるんだろうな。

調教って単語で、腰を動かしてないのに、ピリッと電気が走った。

知子さんの声を聞いてるうちにエッチモードに切り替わっちゃった。課題をクリアできなかったら、どんな体罰を加えられるんだろうか。こんな苦行を続けるより、快感に悶えながら泳ぐほうが愉しそうだとか。

ええい、やっちゃえ！
あたしは、腰をくねらせて本格的なドルフィンキックで泳ぎ始めた。
水を蹴るたびに、クリトリスがつぶされて電気が走り、クレバスに埋め込まれた結び玉が膣口をえぐる。圧迫される痛みが、そのまま快感。荒縄の毛羽が粘膜に突き刺さる激痛が快感に変わったくらいだから、やっぱりあたしは真性マゾだ。
バシャッ、びくん、バシャッ、びくん、バシャッ、びくん……水の中を泳いでるんだか快感の波に乗ってるんだか。なんで、これを怖がってたかな？
怖がるのが正常なんだと、すぐ体感した。
「うああ……いいっ！」
声がぶくぶくっと泡になったのにも気づかず、そのまま息を吸い込んだ。喉が胸が、焼けるように痛い。
がぼっと吐き出した泡が、最後のひと息。焼けるような痛みを我慢して、息を水中で吸い込まないように必死の努力。頭がガンガンして、目の前がまっ赤。
落ち着け。足が立つんだから――立てない！　脚を下に曲げても底に届かない！？
手を縛られてるときは、まず身体を丸めて

……足首もそろえて縛られてるから、うまく胸元に引きつけられない。でも、さっきは立てたはず。どうやったんだっけ……
　頭痛が薄れて、視界が暗くなってく。もう、駄目――てところで、身体を引き起こされた。
「うあああああ……あん」
　助かったという安堵と、課題をクリアできなかった体罰への恐怖と、エッチモードが吹っ飛んだあとに残る自己嫌悪と恥ずかしさと――あれやこれやが一緒くたになって。あたしは大声で泣きだしてしまった。
　昨日みたいに。先生はあたしの頭を胸に抱き寄せて、思う存分泣かせてくれた。
　五分もすると気分が落ち着いてきた。
「これだけ泣けばじゅうぶんだな。顔を洗え」
　腋の下に手を入れて持ち上げられた。先生の意図を察して、あたしは大きく息を吸って止める。
　ざぶ……水中に沈められた。けど、頭を押さえつけるとかはされなくて、すぐ引き上げてもらえた。
「あと八本だ。泳ぐか？」
「……」
　あたしは返事しなかった。先生のつぎの言葉を待ってる。

「ギブアップするなら、それでもいいが。泳いだのは十本のうち二本だけ。厳しい体罰になるぞ」
　再挑戦しても、クリアする自信はゼロ。それに、じわっとエッチモードに傾いてきてるので、体罰への恐怖が好奇心に。でも、昨日は股間への一発でダウンしちゃった。八本残りだから八発だなんて言われたら、叩かれる前に気絶しちゃうかも。
　でも。課題なんか口実だって、もうわかってる。完璧にクリアできても、最初のとき途中で立ってるのを口実に、やっぱり体罰なんじゃないかな。
「……どんなに厳しくても我慢します」
　うわあ、言っちゃった。
　ふっと、先生が薄く嗤った。
　知子さんもアクメの余韻から醒めて。いつのまにか縄もほどかれて。脚をわざわざ直角に開いた座り方で、あたしを奇妙な目つきで眺めてる。ううん、違う。同情とか軽蔑とかではなくて――そうだ、同病相憐れむって眼差しだ。
　だけど、知子さんの座り方。アダルトサイトで見た記憶がある。脚を直角に開いて、手は後ろで組んで。まったくの無防備。お好き

なところをお好きなように虐めてください、抵抗はしませんってポーズ。この座り方だと恥丘の焼き印がすごく強調されてる。あと、バストも。挑発的に突き出してるんじゃなくて、たわわに実ってる。Ｄカップかな。こういうのが、ほんとの美乳だ。アンダーを締めつけてのＢは、やっぱり微乳。

でも、いいもん。あたしは（誕生日が四月なので）●五歳。知子さんは、一年前まで神田先生の補習を受けてたっていうから、●九歳かな。あと四年もすれば、あたしのバストだって知子さんに追いつく（と信じたい）。

あたしも縄をほどかれて。昨日と同じ無念無想養成ギプスを装着されて結跏趺坐。ただし、鎖で海老責めにはされなかった。ウエストのベルトについてるバンドは膝を縛ったけど、上体を後ろへ倒せなくなっただけ。サルグツワも目隠しもされなかった。

「最初に教えておくが……」

長尾さんが鞭を手にして、あたしの前に立った。先生に体罰をされると思い込んでたけれど、違ったみたい。厭だなあ。この人のほうが、先生よりサディストってか鬼畜だと、あたしは感じてる。だって、焼き印だよ。

「痛ければ素直に悲鳴をあげていいぞ。手加

減してほしければ、そう言え」
　思ってたよりやさしいみたい。
「声を出すたびに一発増えるだけだがな」
　ひええ……なんて、余裕こいて震えあがってる場合じゃない。拘束される被虐感で濡れかけていたバギナが、しゅんと音を立てて干上がった。
「さて、何発にするかね」
「未達成は八本ですからね。鞭を八発、それとも八十発。長尾さんが決めてください」
　先生も、負けず劣らずの鬼畜なんだ。
「破瓜の傷がまだ治っていないだろう。八発で勘弁してやろう」
「いいんですか？」
「手加減して八十よりも、本気の八発のほうが厳しいと私は思うがね」
　背筋が凍りつく会話。気絶はしなかったけど。
「長尾さんが、そうおっしゃるなら」
　長尾さんが、あたしの背後にまわった。前へ倒されるんだと身構えていたら。抱きつかれて、長尾さんの腕が胸に。菱形のバンドでくびり出されたバストを根元からつかまれた。
　ぐりぐりと指先を食い込ませて、引きちぎられるんじゃないかってくらい強く引っ張ら

れる。
　くうううう……あたしは歯を食いしばって耐える。呻きも漏らさない。
「これくらいでは物足りないようだな」
　ぎゅううっと捻じられた。外回り、内回り、左右同じ向き。すくなくとも九十度は捻じられてる。まさかバストを捻じ切られることはないだろうけど、乳腺が傷ついたら、将来赤ちゃんにおっぱいをあげられなくなる。
「もう赦して下さい。鞭が一発増えてもいいです」
「一発では駄目だな。三発なら勘弁してやる」
「……三発でいいです」
　どんな条件でも呑むしかなかった。
「よし。胸への愛撫をやめる代償が三発。二回声を出したからペナルティが二発。最初の八発と合わせて十三発になったな」
（……！）
　体罰が始まらないうちから、五発も増やされた。もう絶対に、声を出さない。
　長尾さんが正面に立って鞭をかまえた――てことは、まだバストを虐めるつもりなんだ。約束が……違わないって言うんだろうな。愛撫（あれで？）じゃなくて、体罰のための鞭なんだから。

でも、バラ鞭なのがせめてもの救い。ＳＭプレイグッズの定番だもの。一本鞭や棒状の笞より苦痛が少ない。
長尾さんは左手でバラ鞭の先端をつかんで引っ張った。鞭がピンと張って。
ひゅんっ……バシャッ！
「く……！！」
悲鳴をこらえたんじゃない。息が詰まって声を出せなかった。打たれた瞬間、左のバストがひしゃげたのがわかった。バスト全体が重たい激痛に包まれた。ぷるんとバストが弾んで、焼けるような痛みが残った。
長尾さんが鞭を左手に持ち替えて。
ひゅんっ……バシャッ！
同じ痛みが、右のバストを包んで焼き焦がす。
「あ……！！」
叩かれた瞬間だけ、空気が肺から押し出されて短い呻きになる。
思い出した。バラ鞭っても種類がある。ビニール紐を束ねたようなヘロヘロの物から、革紐を編み上げたのまで。この人たちがライトＳＭ用のオモチャを使うはずがない。
あと一発ずつ左右を叩かれてから、あたしは前に押し倒された。膝と肩が床につく。

警告なしで、いきなり鞭が唸った。
ぶうん……バシイン！
すさまじい音で心臓が縮みあがったけど、叩かれたのはヒップ。痛いけれど、息が詰まるとか悲鳴を噛み殺すとかはしなくてすんだ。最初の身体検査で、ケツは手加減なしで叩けるって先生は言ってたけど、なるほどと納得しちゃった。
つぎの一発は内腿。こっちのほうが、ずっと痛い。
またヒップを叩かれて。これで七発――と数える余裕ができた。つぎも内腿かな。バストの時も規則正しく左右左右ときて、左のヒップ、右の内腿、右のヒップだから……
しゅるっ……音が違うと気づいたときには、股間を鞭打たれていた。
「ぎゃあああああっ！！」
キャアとかヒイイていう甲高い悲鳴じゃなくて、猛獣が吠えてるような、野太い絶叫。
恥丘、クリトリス、ラビアのすべてに鞭が当たって、バギナの中にまで叩きこまれた。昨日縄束で叩かれたときにも股が爆発したような激痛だったけど、これはケタが違う。ずしっと圧迫されるんじゃなくて、無数の刃物で切り刻まれたような鋭さ。

「声を出したな。今のはノーカウントで、プラス一発。あと八発だ」
　え……計算が合わない。でも、声を出すたびに一発ずつ増えるんだから、仕方ないやと納得してしまった。
　つぎも、鞭の先が床シートをこする音とともに、下から股間を直撃された。
「ぎゃあああああっ！！」
　激痛が脳天に突き抜けて、打たれてしばらくは全身の震えが止まらない。
「あと九発に増えたな」
　やっぱり、変だ。でも、どこで騙されてるか考えられる状況じゃない。
　つぎこそ悲鳴をあげないようにと、あたしは息を吐き切った。息を止めて鞭を待つ。
　しゅるっ……バシャアッ！
「がっ……」
　肺に少しだけ残っていた空気が押し出されたけど、それはとがめられなかった。ほっとして止めていた息を吸ったとき。
　しゅるっ……息を吐けなかった。
「ぐぎゃあああああっ！！」
「おやおや、また九発に戻ったな」
　長尾さんが、からかう。からかいながら、硬い物をバギナに突き刺した。そんなに太く

はないし、金属の冷たさもない。たぶん、鞭の柄だ。乾ききってるから、痛いだけ。
「一発ごとに増えていくと、ここが壊れるぞ」
　ぐりぐりと柄をこねくられる。エッチモードも被虐モードもスイッチが切れてるから。
　ぼろぼろと涙があふれてくる。
「ひどいよ……おかしいよ。なんで増えちゃうの？　インチキだよ」
「声を出したから一発。指導者を侮辱した罪で五発。あと十五発だな」
　どんどん増やされる。八発でも八十発でも、長尾さんには同じことだったんだと気づいた。ヒップを叩かれたときの風切音に比べると手加減はしてくれてるらしいけど、四十五口径でも二十二口径でも、急所を射たれれば死ぬことに違いはない。
「長尾さん。指導が至らぬせいで、お手数を掛けて申し訳ない。すこし時間をいただけませんか。二度と暴言を吐かぬよう、言い聞かせます」
　暴言って……インチキだって言ったこと？　だって、叩かれるたびに残りが増えるなんて、どう考えてもインチキだ。
「それに、奥さんが手持無沙汰にしてますよ。実は、ちょっとしたオモチャを準備してまし

てね」
　神田先生がボストンバッグから取り出したのは、小さな木の板と細い金属棒。
　ビート板のコーナーから、コースロープにとおす細長いフロートを持ってきて、金属棒に刺した。そして、棒の先端を木の板にとおして、蝶ネジで固定した。
「●学では、これでさんざんに虐められたそうだな？」
　知子さんの顔が青ざめた。
「似たようなことはさせているが、そこまで太いのは使ったことがない。昔を思い出して、やってみろ」
　知子さん、泣きそうな顔で立ち上がった。
「おっと、その前にセンデキだ。学校の備品を汚しては、先生に迷惑をかける」
　長尾さんが、知子さんを出入口へ追い立てた。
「あとで、おまえにも同じことをする。見学しておけ」
　結跏趺坐をとかれて、あたしも追い立てられた先はシャワー室。
　知子さんは両手両足を伸ばした四つん這いの姿勢。
　長尾さんが、水の勢いよく吹き出している

ホースを引っ張ってきて、知子さんのヒップにあてがった。まわりに飛び散る水しぶきは少なく、ほとんどがアヌスからお腹に注入されてく。
　知子さんのお腹が、ひと目でわかるくらいに膨れて。
「噴水にはするなよ」
　長尾さんがホースをはなすと、知子さんは膝をついてヒップを下げて――ぶしゃあああっと水を噴出した。タイルに叩きつけられる水流には、固形物もすこし混じってる。
「ううーんんん」
　知子さんがいきむと、腸内に残っていた茶色の水が、ぼちゃぼちゃっとしたたった。
　注入してすぐに出すから、責めにはなっていない。知子さんは、けろっとしてる。けれど、知子さんはあたしとM度がケタ違いみたいだから、あたしには苦しいかもしれない。
　けろっとしてるって言えば。ほんとに苦痛はないのだとしても、男の人に見られながら排泄するんだよ？　羞恥心はないのかな？
　三回もセンデキ（洗浄と似たむずかしい漢字だっけ）すると、透きとおった水しか出なくなった。
　みんなでプールサイドへ戻って。

「きちんと座れ」
　先生に肩を強く押さえつけらえた。きちんと――の意味を察して、あたしは正座した脚を直角に開いた。
　だいたい見当はついてたんだけどね。知子さんはガニ股になって板の両端を踏んだ。で、まん中に突っ立ってるフロートに向かって腰を沈めてく。両手でラビアをクパァして、その中心にフロートを突き立てた。
　うわあ。ここのプールだけフロートが小さいってことはないよね？　標準サイズだとしたら直径は六センチで長さは三十センチくらい。ペニスよりずっと太くて長い。
「く……くうう」
　眉根を寄せて苦しそうっていうか、なまめかしいっていうか。全身にじとっと脂汗をにじませながら、でも、ゆっくりとバギナに呑み込んでいってる。見てるあたしまで、処女膜を引き裂かれたときの痛みが甦ってくる。
　完全に腰を落として、でも呑み込んだのは長さの半分くらいかな。
「くう……ふう。うう、きついよう……」
　ゆっくりとスクワットを始めた。
「くううう……う……うん、うん、うん」
　スクワットがだんだん早くなって、最後は

ピストン運動。苦しそうだった顔が、恍惚としてきた。でも、ここまでは本番のための準備でしかなかった。
「もう、十分に濡れたぞ。さっさとケツマ●コに突っ込め」
　ひえええええ……裂けちゃう。切れ痔になっちゃう。
（あ……？）
　神田先生、●学ではって言ってなかった？つまり、あたしの歳で、あんなのを挿れてたってこと？
　実は、知子さんの学校では直径五センチのフロートで、これよりはひとまわり小さかったと、あとで先生に教えてもらった。にしても、標準サイズのペニスより、はるかに太い。
　それはともかく。これは六センチだよ。前の学校のプールで使ってたのと同じだもん。
　なんで、直径をきちんと知ってるかというと――こんな極太で処女を奪われるって妄想して、リアリティを出すために測ったことがあるから！
　知子さんは腰を浮かしてバギナからフロートを抜き去った。エッチなお汁でフロートもラビアもぐっしょり。知子さんはラビアのお汁を指で掬って、アヌスに塗り込めた。そし

て、腰を前にずらして。
　今度こそ、知子さんは必死で苦痛に耐えて悪戦苦闘してる。口を大きく開けて、ゆっくり深呼吸して、息を吐きながら腰を落として。
「痛いっ……！」
　びくんと中腰に跳ねて。クリトリスとバギナを両手で刺激してエッチなお汁を溢れさせては、フロートとアヌスに塗りつけて。大きく吸った息をゆっくり吐きながら、腰を落としてく。
　根性とか淫乱で、こんなことをしてるんじゃないと思いたい。ちゃんと挿れられなかったら、きっと六センチよりも厳しい体罰が待ってるんだ。知子さんは補習じゃないから、お仕置きとか懲罰っていうべきかな。
　そうして。ついに知子さんはフロートをずっぽり腸に挿れてしまった。バギナより奥行きがあるから、三十センチをまるまる。
　で、ゆっくりとスクワットを始めた。
「どんなに無理と思っても、黙って受け容れて実行する。それが、めすど……受講生のとるべき態度だ。わかったな」
　無防備に晒した股間を、神田先生がつま先でくじった。鞭打たれてずきずき痛んでるというのに、ちょこっとだけ感じてしまったの

は――それだけ巧妙な動かし方だったせいもあるけど、長尾さんじゃなくて神田先生だからかも。先生は、ときどき（だけど）あたしをやさしく扱ってくれる。ので、つい甘えた気分になっちゃう。けっして師弟の絆とかじゃなくて、飼い主とペットの関係なんだと頭ではわかってるけど。
「わかりました。がんばります」
　先生が牝奴隷と言いかけたのは聞かなかったことにして、素直に返事をした。
「では、体罰の再開だ」
　長尾さんの無慈悲な声。
　あ、そうだ……。
「先生、お願いがあります」
「ん……？」
「昨日のサルグツワ。あれを着けさせてください」
　強制的に声を封じてもらえば、鞭の数は増えない。
「それは許さん」
　うう……体罰は長尾さんにゆだねられてるし、長尾さんのほうが偉いみたいだし。
「そのかわり、一度だけチャンスをやろう」
「……？」
「本来はあと九発だが――つぎの一発に耐え

られたら、それで終わりにしてやる」
　その一発が、ヒップを叩いたときみたいな強烈なやつだったら？
「もし悲鳴をあげたら、文字どおりの百叩きだが。処刑は次の機会まで猶予してやる」
　つまり、どっちにしても、あと一発で赦してもらえるんだ。でも、たぶん、絶対……百叩きになる。見えすいた罠だけど。一週間も未来の心配はしてられないし。
「……そのチャンスをください」
　罠を踏むしかなかった。断わったら、残りが百発になるまで叩かれるだろうくらい、この人のやり口はわかってるつもり。
「いい覚悟だ」
　長尾さんと先生が、そろって残忍な笑みを浮かべた。
　あたしは、また結跏趺坐を組まされた。今度はあお向けに転がされて、先生が脚を押さえつける。まるっきりマングリ返し。うう、背中の下の手錠が手首に食い込んで痛い。
　長尾さんがバラ鞭を手にして、正面からあたしの股間を覗き込んだ。
「かなり腫れてはいるが、まだ肌が裂けていない……が、この一発でどうなるかな？」
　長尾さんが鞭を後ろに引いた。引っ張って

反動をつけるんじゃなくて、フルスイングの体勢だ。そして、あたしの股間は上を向いてる。これまでは鞭を下から跳ね上げられてたけど、今度は大上段に叩きつけられるんだ。
　カチカチカチカチ……歯の震えが止まらない。背筋がずうんと重くなって、全身に鳥肌が立った。怯えてる場合じゃない。息を全部吐き出しとけば、悲鳴をあげずにすむ。
　あたしは、ヒュウウと喉がなるほど息を強く吐き出した。
　吐き出し終わるのを待っててくれたのかな。「いくぞ」
　予告までしてくれて。長尾さんの右腕が肩の上まで振り上げられて。
　ぶうんっ……バジャアッ！
　これまでの鞭はずいぶん手加減してくれてたんだと、一瞬に思い知った。
　爆発なんてもんじゃない。重たいとか鋭いとかの形容も意味をなさない。激痛なんて月並みな表現じゃ表わせない。得体の知れない衝撃が股間から脳天まで突き抜けて、暗闇の中で火花が飛び散った。
　――意識を回復したときも、まだ座禅の形に拘束されたままだった。
　気を失っていたのは、ごく短時間だったの

かな。知子さんは、まだアナル・スクワット（？）を続けてる。
　思っているよりも長い時間だったのかもしれない。知子さんの裸身は、いろんなアクセサリーで飾られてる。乳首にスポイトみたいなのが貼り付いてて、股間にも似たようなアイテムが垂れ下がっている。
「あん、あん、あん、あん……」
　規則正しく喘ぎながら、両手でディルドをバギナにも出し挿れしながら、膝を屈伸させて、それだけでは物足りないというように腰をくねらせている。
「目が覚めたか。最後の一発に耐えた褒美をやるが、その前に……」
　あたしは結跏趺坐のまま、二人に抱えられてシャワー室へ連れてかれた。硬いタイルの床に座禅転がしにされて。
「きゃっ……」
　アヌスに冷たい水流を当てられて、これからセンデキされるんだと悟った。
　ホースの口がアヌスに押し当てられて、ぐぼぼぼぼって感じで、腸に水が詰め込まれてく。お腹が張って苦しいって、一昨日までなら形容してたろうけど。いろんな苦しみを体験させられた今では、これくらいではそんな

形容は使えない。ちょっと――なんていうんだっけ、膨満感？　それがあるだけ。便意も切羽詰まらない。ホースをはなされても、我慢してられる。
　身体を起こされて、ヒップを浮かした姿勢で肩を支えられた。
「遠慮せずに出してしまえ」
　なこと言われても。知子さんみたいな度胸はない。他人に、それも男の人に排泄を見られるなんて恥ずかしすぎる――と、本気で思ってるのに。ちょっとだけ括約筋を緩めてみたい誘惑に負けて。
　ぶしゃあああああっ……迸り始めた水流は、そう簡単には止められないし。排泄の快感には逆らえない。
「いやああ……見ないでください」
　これは、レディのたしなみとして、そう言ってみただけ。でもマゾ娘の作法じゃないような気もしてきた。のは、ともかく。
　まだお腹に水が残ってる感じがしてるのに、座禅転がしされて。またお腹に水を注ぎ込まれる。そして、身体を起こされて噴出。知子さんと同じように、三回繰り返された。
　知子さんと同じ？　じゃあ、つぎは六センチフロートのスクワット？

じゃなくて、ほんとにホッとした。拡張訓練を受けてなくちゃ、あんなの無理だよね。
プールサイドに連れ戻されて。知子さんが着けてるのと同じスポイトを乳首に吸着された。そう、これは真空を利用して局部を責めるアイテム。だから、ただのスポイトじゃない。内側に柔らかなブラシが何本も植えられてて、乳首を刺激する。
クリトリスにもスポイトを吸い付けられた。こっちのは口が細くて胴が長い。内側にブラシがあるのは同じ。
これだけだと、刺激はあっても平然としてられるんだけど。乳首のはスポイトの先端に、クリトリスのは胴の途中に、円筒が突き出てるし、そこから電線が伸びてるから、これからなにが起きるかはわかってる――つもりだった。
あたし、物欲しそうな顔してたんだろうか。
「そんなに期待されても困るんだがな」
先生が苦笑いしながら、手に持ったリモコンのスイッチを入れた。
ブウウンン……ごくかすかな音がして。
「ひゃうんっ……なに、これ？」
この円筒、あたしの隠し持ってるローターより小さいくせに、すごい快感。ブラシが接

触してる部分をソフトタッチだけれど強烈にくすぐって、津波のような快感が押し寄せてくる。
「ああああ、ああんっ……」
　自然と声が噴き出ちゃう。鞭で叩かれてずきずき痛かったのが、そのまま快感に塗り替えられる。
　乳首もクリトリスも、スポイトに吸い出されて膨らんでる。そこを柔らかく激しく刺激されるんだから、もうどうにもならない。
「ああああ……すごい……逝く、逝っちゃうよう！」
　てとこで、ぴたっとバイブが止まった。
「やだあ……止めちゃ、やだ。スイッチを入れてよ……入れてください！」
　我ながら浅ましいと思うのだけど、本能が快感を求めて、おねだりの言葉をあたしに言わせてる。
「期待にはそえたかな？」
　先生の意地悪！
「はい……すごく、いいです。もっと虐めてください」
　かわいがってくださいって言うつもりだったのに、自然とマゾっぽい言い方になった。でも、でも……股間への鞭打ちを十発と引き

替えてでも、スイッチを入れてほしい。
　やっぱり、先生はやさしかった。そんな交換条件は持ち出さずにスイッチを入れてくれた。
　ブウウウンンンンン……
「あああっ、ああん。いい、すごく、いい。死んじゃう……飛んじゃう……落ちちゃう！」
　支離滅裂だけど、そのときの感覚を貧弱なボキャブラリで表現すると、そうなった。
　ふわあっと身体が倒れてく――のは、アクメの錯覚ではなくて、実際に座禅転がしにされたから。
「ケツマ●コにチ●ポを突っ込むと、もっと気持ちよくなるぞ」
　長尾さんの声が天啓のように聞こえた。
「……挿れてください」
　昨日はすごく痛かったけど、今だったら快感かも。本気で思った。こういうのを調教っていうんだろうな。
　ずぐっと、一気に貫かれた。引き裂かれるような灼熱感がヒップに広がって。
「うあああああ……いい。ほんとに気持ちいいよう！」
　痛いことは痛いんだけど、それが快感を増

幅してる。お汁粉の塩と同じ理屈かな――と、あとで思った。今は、なにも考えずに快感を貪ってる。
　アヌスを貫かれながら、あたしは二度目のアクメに達した。でも、刺激は続いてる。長尾さんが射精して先生と交替して。やっぱり、先生とは肌が合うのかな。先生が射精するタイミングで、あたしも三度目に達しちゃった。
　そのあとは、バギナにもアヌスにもバイブを挿入されてベルトで固定されて。アクメの余韻に浸る暇もなく、強制絶頂の連続。
　――八回目くらいまでは覚えてるけど、それからも責められ続けて。二十回以上は逝かせられたと思う。
　頬を叩かれて目を覚ましたのは夕方になってから。長尾さんと知子さん（どうしても、夫婦って単位では考えられない）は、とっくにいなくなってて。あたしも、ボディハーネスはとかれてて、完全な全裸だった。
　先生に手伝ってもらってシャワーで身体を（下半身は沁みるけど入念に）洗って、制服を身に着けて。腰が砕けて歩けないので、駐車場まで先生におぶってもらって。
「図書室で倒れていましてね。貧血でしょう。寮まで送ってやりますよ」

なんてガードマンさんを誤魔化して。車は寮へ直行せずに、三十分ほどドライブ。
ふんどしのヨコミツ、タテミツとかは、このときに教えてもらった。
　そして、今明かされる衝撃の事実――なんて、やらせドキュメント番組の真似はやめとく。
知子さんは、まだ●七歳！
知子さんは●校から編入のバラ組。なんか、●学のときにエッチ方面で問題を起こして田舎の学校に転校して、そこで性的イジメを受けてマゾ開眼したんだとか。性的イジメの黒幕が体育教師だったなんて、どっかで聞いた話のような気がするけど。
その黒幕と神田先生とは以前からの知り合いで。だから知子さんは、入学早々から課外補習の餌食にされた。
長尾さんは、七白学園がお金を借りてる銀行の本店なんとか役って偉い人で、かつ、神田先生と同じＳＭサークルの会員。昨日みたいに何人もで知子さんを調教して、すっかり気に入って、強引に中途退学させて結婚したんだそうだ。
戸籍上の夫婦なら淫行は関係ないし、焼き印だろうがタトゥだろうが、誰にも文句をつ

けられない。
　結婚には両親の承諾がいるんだけど――札束ビンタと既成事実とで親を屈服させたっていうのが先生の説明。ま、だいたいの想像はつくよね。
　――寮の五百メートルほど手前で車から降ろされたときには、なんとか歩けるようになってた。
　まだ頭がぼうっとしてるし、ガニ股には気をつけてても、ずきずき痛む下半身をかばって、どうしても腰が引けてしまう。意識してブラウスの袖口を引っ張ってないと、手錠の痕が露出するし。注意して見れば首輪の痕もわかるはず。廊下ですれ違うくらいなら問題ないけど、同部屋の東さんには異状を気づかれるかも。
　事実――ふらつきながら二段ベッドの梯子を上がるあたしを、東さんは勉強机のとこからじっと見つめてた。でも、なにも言わなかった。

４．潜水特訓

精神的にもだいぶん参ったけど、オンナになったんだなあという感慨もあったし、いきなりハードな調教を受けて耐え抜いた（かな？）という達成感もあったけど。肉体的にはズタボロのガタガタ。それでもひと晩寝ると、それなりに回復して。学校で不審がられるとかはなかった。

火曜日にまるきり予定外の生理が来ちゃったのは、先生にもらったアフターピルのおかげ。あれだけ何度も中出しされて不安だったけど、これで大安心。生理を口実に体育の授業をサボろうかと思ったけど、タンポン派でふだんから生理見学はしないから、いつもどおりってことで。レイプと鞭のダメージは、もう完全に回復してたし。

金曜には生理が明けた。同部屋の東さんは珍しく外泊（里帰り）なので、ここぞとばかりローターも持ち出してオナニー。でも、ぜんぜん物足りない。乳首とクリトリスに吸い着いたキャップの振動を思い出して悶々。それでも、逝くだけは逝った。

それから。アンダーヘアが生えかけてるの

で、シャワールームで除毛フォーム。もし調教を受けれなくなっても、パイパンは続けると思う。だって、生えかけのチクチクが、すこしだけ快感があるので、かえって鬱陶しい。
　そして、土曜日の午後。
　この日はバスケ部が午後も練習してたので、体育館の外階段をプールまで上がるのがスリル満点。しかも。勝負下着も無視されちゃうから、今日は着けてない。膝がかろうじて出るくらいのスカート丈だから、下から覗かれてもだいじょうぶなんだけど、やっぱりドキドキ。
　どんな人がコーチに来てるのかなと、それもドキドキ。
　階段を三回折り返して、施錠されてることになってるドアを開けて、また十五段昇った踊り場に、今日はふだんのジャージ姿の神田先生。
　今日は更衣室を素通りじゃなくて、そこで制服を脱いだ。
　ええい、どうだ！　ジャンスカを落としたら、すでに下脱ぎ。
「ノーブラノーパンか。そういえば、おまえには露出癖があったな」
　どき。なんで知ってるんだろ。いままで誰

にもばれてないはずなのに。
「どうせなら、あと一枚がんばって、裸ジャンスカで来てみろ」
　それは無理。誰かに見られたらアウト。
「露出趣味のおまえに水着はいらんな」
　先生、ほんとに裸のあたしを更衣室から追い立てた。ま、どうせすぐ全裸以上に恥ずかしい格好にさせられるんだから、手間が省けていいけどさ。
　シャワー室を抜けて。
「えええええーっ！？」
　そこにいるはずのない人物が、そこにいた。
「やだっ……！」
　両手で胸を隠してうずくまった。
「今さら恥ずかしがっても手遅れだ。さっさと立って、ボディチェックの姿勢をとれ」
　手遅れでもなんでも。朝晩顔をつき合わせて、挨拶も欠かさない人にこんな姿を見られるなんて、神田先生との関係を知られるなんて、絶対に厭だ。
「立ちなさい、昌美ちゃん。恥ずかしいのは、あなただけじゃないのよ」
　ツインテを上に引っ張られた。しぶしぶ立ち上がって。今度は叫ばなかったけど、目の前の女性の姿をまじまじと見つめた。

股上が浅めのボクサー型水着。つまり男性用。を、ボンキュッボン（死語）の東美世子さんが穿いてると、ふんどし以上にミスマッチで妙にエロい。
そう……目の前にいる女性は、寮で同部屋の、三コ年上の東美世子さん。
つまり、この人も先生の生徒だったんだ（なに、この日本語？）。
その証拠に、知子さんに負けないくらいのバストに赤黒い鞭痕が何本も刻まれてる。目の下にクマがあるのは、もしかして一晩じゅう責められてたとか？　先生は寝不足に見えないから、あのキャップとかバイブで放置プレイだったかも。羨ましいなあ。
「今日は、こいつがマ●コツーマ●コでコーチに就く。先輩に逆らうんじゃないぞ」
ひっどい駄洒落。
先生は、あたしと東さんをプールサイドに残して、壁際のベンチに陣取った。腕組みをした手首には、例の携帯型端末が嵌められてる。
ぱしん。東さんが、手にしてた竹刀で床を叩いた。
「いつまで、そうやってるつもり？　命令はすぐ実行しなさい」

命令って……？　ああ、そうでした。
あたしは背を伸ばして両脚を三十センチばかり開き、両手を頭の後ろで組んだ。
竹刀を股間に差し入れて、東さんはあたしの股間をぴたぴた叩いた。
「自分で縛ってほどけなくなって、先生に助けてもらったそうね」
それ、後半が違う。
「体罰ありの補習って言われて、ここを濡らしたの？　初めて先生に縛られたときから感じまくってただなんて――変態！」
ばしんと強く叩かれたけど、先週の鞭に比べたら余裕で我慢できる。でも、憧れてた先輩に変態と決めつけられて、（たとえ事実でも）すごくみじめで悲しい。
「東さんだって、先生にかわいがってもらって、そんな格好してあたしを虐めて――変態じゃないですか」
ビンタが飛んできた。反射的にあたしはよけた。
「ごるぁ！　目の前にいるのはコーチだぞ。そして、おまえは**おかしてまぞみ**だ。東美世子と岡下昌美じゃないんだぞ」
なこと言われても。エッチモードに切り替わんない。けど、つぎに東さんが右手を上げ

たときには、脚を踏ん張って歯を食いしばった。
　バチイン！　目の前に星が飛んだ。
「気安く名前を呼ぶんじゃないわよ。わたしのことは先輩って呼びなさい」
「いや、お姉様にしとけ」
　神田先生が茶々を入れた。けど、そのほうがエッチモードにはいりやすいかな？
「もひとつ言っとくけど。わたしは神田先生にかわいがってもらったことなんか、一度もないからね。わたしはマゾじゃないんだから」
（……？）
　どゆこと？　なにか弱みを握られて、無理強いに調教されてるってこと？
「それでも、身体は縄と鞭に馴染んできたがな」
「先生！　口出しはしない約束だったんじゃないですか」
　ここまで強く言い返せるなんて、たしかに心は馴致されてない。
　東さん――じゃなくて。お姉様は、つかつかと先生に歩み寄った。用があったのは先生にではなくて、隣のボストンバッグ。取り出したのは、鎖と鉄アレイ。
　お姉様が戻ってきて、あたしの背後にまわ

った。頭の後ろで組んでるあたしの両手をそのままクロスさせて、手首に鎖を巻きつけた。
　カチッ……鎖をほどけなくする掛け金かな。さらに首にもひと巻されて、カチッ。
「わかるわよね？」
　唇に鉄アレイをあてられた。わかる……けど、これ、丸い部分の直径は四センチを超えてる。先生のペニスより、ちょい太いかな。とにかく、鉄アレイを口に含んで丹念に唾を塗り込めた。
　お姉様は鉄アレイをあたしの股間に下から押し当ててラビアを掻き分け、ぐうっと突き上げた。
　痛い……そこ、ずれてる。ので、あたしが腰を動かして膣口に迎え挿れた。引き攣れるような痛みがあって、にゅぽんと丸い部分がバギナに押し入ってきた。鉄アレイを握る部分は二センチくらいだから、そこまで挿入されると痛みは消えた。
「落としたら体罰だからね」
　言われなくても。意識して締めつけなくても。丸い部分がつっかえてる。
　お姉様は、さっきより太い鎖をあたしのウエストに巻きつけた。腕に筋肉が盛り上がるくらい力を込めて引き絞った鎖を重ねて、鎖

と同じくらいの大きさの輪っかをちょこんとぶつけると。カチッ……輪っかが鎖を閉じ合わせた。
　鎖はさらに股間をくぐって後ろへ引き上げられる。ぐううっと鉄アレイが突き上げてくる。でも、丸い頭のてっぺんを鎖で押さえても、すぐ弛むんじゃないかな。
　後ろも掛け金で留められて、鉄ディルド付鎖ふんどしの出来上がり。
「ノーブレスト二十五メートルの特訓よ。プールにはいりなさい」
　ちょ、ちょっと待ってよ。鎖で雁字搦めだよ。しかも鉄アレイまで挿入されてる。絶対に沈んじゃう。あたし、おもいきりビビッた顔してたんだろう。
「そうよ。浮かびたくても浮かべないの。途中で立ったら即、体罰ね」
　お姉様が意地悪な笑みを浮かべた。演技とかじゃなくて、ほんとに愉しそうな残酷な微笑。この人はマゾじゃなくて、本質はサドなんだ――というのは早トチリだったと、おいおいわかっていくんだけど。
　あたしが動かないでいると。パシンと、ヒップを竹刀で叩かれた。
「あの……溺れたら助けてくれますよね？」

　こんなこと、先生には聞かなかった。聞けなかった。それだけ、お姉様のことは信頼できなくて、でも身近に感じてるのかな？
「先生が助けろって言ったら、ね」
　身近に感じなくなった。先生を振り返って。無慈悲に顎をしゃくられて、でも知らんぷりされるより百倍は勇気づけられて。あたしはプールの縁へ近寄った。突き落とされる前に、自分で飛び込んだ。
「あの……何本ですか？」
「そんなことは、ちゃんと泳げることを証明してから言いなさい」
　とてつもなく厭な予感がする。
　じゃあ、証明してやろうじゃないの――て気にはなれないけど。壁際に立って、水に潜って。ぐうんと壁を蹴った。今日は両脚が自由だから、わりとうまくいった。勢いに乗って五メートルラインを通過。でも、どんどん勝手に沈んでる。斜め上に向かって泳がないと底にぶつかる。そしたら、足を着けたとかイチャモンでノーカウントのやりなおしなんだろうな。
　ドルフィンキックを指定されてないので、カエル足。水を蹴って脚を閉じるたびに股間をグリグリされるけど、競泳の平泳ぎみたい

なキック（膝をあまり開かずに、水を蹴るんじゃなくて両脚で挟んで押しやる）よりは刺激が少ない。ドルフィンキックにおいておや（だっけ？　古文は苦手）。
　五メートル先の水面に向かって泳ぐくらいのつもりで。キックで浮上しかけて、引き戻されて急降下。ジグザグだけど平均したら水平に進んでる。余裕で中央ライン通過。そこからは息が苦しくなってきたけど、まだだいじょうぶ。スイミングスクールの頃は二十五メートルがノーブレストの限界だったけど、身体が成長して持久力がついたのかな。
　てよりも。潜水してるから波の抵抗がないのが大きい。キックの推進力は全体の二割くらいって教えられてたけど、比較的ゆっくり泳ぐ場合は、逆転してるのかも。だって、ダイビングだと手は使わないもんね。足にフィンは着けてるけど。
　なんて考えてるうちに五メートルラインも通過。よーし、ラストスパート。なんて無駄に体力を消耗せず、最後は惰性でゴールイン。
　立ち上がるのも簡単だった。手は使えないけど、身体がしっかりと沈んでくれるので足を踏ん張れる。
「余裕たっぷりね。それじゃ、今日のノルマ

は百本にするわ」
　ひええ、スパルタ！　ではないよね。達成不可能なノルマで、なにがなんでも体罰って目論見だ。
　いいよ。やってやるから。そしたら、三点吸着ミニバイブのご褒美をもらえるかも。
　あたしは軽く息を整えて、壁を蹴った。
　股間の違和感が、だんだん強くなってくる。けれど、膣口での直径は二センチくらいだから苦痛はないし、膣性感は未開発だから快感に溺れて水に溺れる心配もない。
　五本、十本とこなしていって。息苦しさが蓄積しないペースもつかんだ。
　百本たって、距離にすれば二千五百。スイミングスクールでも。選手コースの子なんか一万以上がふつうだから、どってことない。
　というのは自己暗示にすぎなくて。手を縛られてて鉄アレイで鎖ふんどしだよ？　息苦しさ（酸素欠乏）は蓄積しなくても、疲労は確実に溜まってく。
　三十本あたりで、脚がだるくなって。そこからは放物線のグラフ（もうすぐ習うから予習してる）みたいにどんどん増えていって、五十本を達成したときは気息奄々。
　でも、ギブアップしない。今日も同じ体罰

とはかぎらないけど、先週より軽くなるはずがない。それと、東さんへの意地かな。
　ほんとにあたしのことをマゾって軽蔑してるのか、ライバルへの嫉妬かまではわからないけど。あたしを敵視してるのだけは、わかる。したら、あたしだって反発するよ。
　疲れると無駄な動きも増えて、ノーブレストが苦しい。どうしても息継ぎをしたくなって。叱られるにしても、立ち上がるよりは罪が軽いはず。ほとんど真上に泳いで、ざばあっと……顔を上げられなかった。頭の後ろで縛られてる手に邪魔された。
　だから、こんなふうに縛ったんだ。と納得するより先に。がぼっと水を吸い込んでしまった。
　ごぼっごぼっと、咳き込むたびに口から泡が噴き出す。体罰の心配より溺れないのが先決。あたしはもうちょっとだけ息を我慢して、じゅうぶんに沈んでから身体を起こした。プールのまん中近くだったので背は立たないけど、底を蹴って脚で水を押して顔を水面から出した。錘のせいで、思った以上に早く沈むから、大急ぎで息を吸った。
「残り四十三本で失格ね」
「まだ泳げます。やらせてください」

「駄目よ。途中で立ったでしょ。どうしても泳ぎたいのなら、体罰が終わってからにしなさい」
　そんなの無意味。
　背が立つとこまでは泳いでから、梯子まで歩いてった。
「さっさと上がってきなさい」
　東さんが床に膝をついて身をかがめ――あたしのツインテを引っ張った。おかげで、転落せずに梯子を上がれたけど。褌を引っ張られるとかヒップを押し上げられるとかのほうが、性的に弄ばれてる感じがして、敵意より嬉しいのに。
　さっそくに鎖をほどかれたけど、鉄アレイはそのまま。投げつけられたタオルで身体を拭いた。
　いつもと同じボディハーネスを東さんの手で装着された。ぎこちないていうか、無駄にぎゅうぎゅう締めつける。それでいて、微妙にゆるい箇所もあるので、身悶えすると革バンドが肌にこすれて擦り傷になる。
　バギナ責めのために鼠蹊部へ迂回してたバンドが、今日は真下へ引っ張られた。鉄アレイが奥まで押し込まれる。ここで気づいたんだけど、股間から突き出てる丸い部分には太

い溝が彫られていた。鎖もここに通されてたから、激しい動きをしても緩まなかったんだ。
　鉄アレイを通ったバンドは、太腿の付け根に沿って横へ引き上げられた。アヌスはがら空き。でも、二つ目の鉄アレイもコースフロートも赦してほしい。
　背後に手首をねじ上げられて手錠。上体を軽く曲げた位置で、ウエストのベルトから伸びているバンドを両膝につないだ。身体が前に倒れたぶん、鉄アレイが押し込まれて膣の奥を強く圧迫する。
　これだけでも、ふつうの子には厳しい拷問なんだろうけど。まだ体罰を受ける準備が整ったにすぎないことは、もうじゅうぶんに思い知ってる。
　これからなにをされるか――あたしは、心の底から怯えてる。妖しいときめきとか腰の奥の疼きなんて、これっぽっちも感じてない。相手が女性だから――ではないと思う。レズだって興味が無いわけじゃない。なぜマゾのスイッチがはいらないんだろうか。
　東さんがあたしの前にしゃがみ込んだ。
「体育館ではバスケ部が練習してるけど、気にしなくていいわよ。ここでどんなに大声を出しても、床を踏み鳴らしても、下には聞こ

えない。階段口のドアは鍵を掛けたし、途中に更衣室があるから、声は漏れない。だから、うんと泣き喚いていいのよ」
　それは、脅しじゃなかった。東さんは、あたしの目の前で小さなクリップを開閉させた。くちばしがギザギザに尖ってる、電気の実験なんかで使うワニグチクリップ。
　ぞわあっと、全身が総毛立った。洗濯バサミでも乳首なら二十秒、クリトリスなんか一瞬でギブアップしちゃう。でも、これは……どんな痛みか想像もできない。ひとり遊びなら、すぐに自分で取っ払えるけど……
「お願いです。とても無理です。赦してください」
　無駄とわかっていても、半泣きでお願いしてしまう。
「あら。マゾのあなたなら、これくらい平気でしょ？」
「あたし……痛いのは苦手なんです」
「好き嫌いは駄目よ」
　そういう問題じゃない。
「わたしだって、こんなの大嫌い。でも、あなたと同じように自由を奪われていたから、我慢するしかなかったのよ」
「え……？」

はっと顔を上げて。東さんと目線がぶつかり、絡み合う。
そうか、そうなんだ。先輩も、これで責められたんだ。なら、あたしだって試練に耐えなくちゃ――そんな気になってきた。だって、東さんは根っからのマゾってわけじゃなさそう。言葉の端々から、いやいや調教されてるってわかる。それでも、ワニグチクリップの試練を乗り越えた（乗り越えさせられたんだろうけど）。
「わかりました。あたし、お姉様に負けません」
言ってから、しまったと思った。挑発的な言い方だった。
「そう？　それじゃ、わたしに勝てるようにしてあげるわ」
東さんはボストンバッグから、新しい小道具を持ってきた。ロリポップキャンディくらいの大きさの金属球、輪ゴム、先端を切り落とした注射器みたいのは『乳首、責め、通販』の検索で見たことがある。
金属球はタコ糸でワニグチクリップにつながれて、輪ゴムは別のワニグチクリップに結びつけられた。錘のついたクリップが二個と、輪ゴムのが一個。どんなふうに使われるか想

像はつくけど、頭に思い描くことすら拒絶反応。
「それじゃ、体罰を始めちゃうわよ」
　予想どおりに、注射器の先細りになってる部分が乳輪に押しつけられた。密着させて東さんがピストンを引くと、きゅううっと乳首が吸い出されて、興奮したときより大きく膨らんでく。筒の端にゼリーみたいなのが塗られて空気漏れを遮断してるから、ピストンを引けば引くだけ乳首が大きくなってく。
「あうう、ふううんん……」
　ちょっと痛くて、その十倍は気持ちいい。
　注射器の太い部分に嵌められてる黒いゴム環が、するっと滑って。乳首の根元を締めつけた。
　きゅぽん――と、注射器がはずれても、ゴム環は残ってる。輪ゴムじゃない。直径は小さいのにゴムが太くて、ミニミニサイズのドーナツて感じ。乳首は根元を絞られてるから吸引されたままの大きさで、充血して色も濃くなった。反対側のバストにも同じ処置をほどこされて。
　ここまでは、なんていうかな。ご褒美の先払いって感じだったけど。
　大きく膨らんだ右の乳首に、あんぐりと口

を開けたワニグチクリップが近づいて。あたしの背中にツウッと冷たいものが走る。
　ワニの口が乳首を呑み込んで、じわっと閉じてゆく。
「ひぎゃあああああああっ……！！」
　あたしは息が続くかぎり絶叫した。洗濯バサミの痛さを百万倍したとかじゃない。まったく異質の劇痛。劇物、劇毒の『劇』。
　乳首を鋏でちょん切られたら、きっとこんな痛みだろう。ううん、それよりもたちが悪い。永遠にちょん切られ続けてる。
「はわわ、はわわ、はわわ……」
　息が震えてる。
　生まれて初めて体験する劇痛のレベル。は、あっさりと更新された。さらになにかをされたわけじゃない。東さんが、ただ手をはなしただけ。ピンポン球より小さな錘が乳首を下へ引っ張って、ふたたびあたしを絶叫させた。
「聞き苦しいわね。こんな声が『いい鳴き声』だなんて、サド男の美意識を疑っちゃうわ」
「はわわ、はわわ、はわわ……いやあ！」
　左の乳首にもワニグチクリップを突きつけられて、あたしは泣き声だった。
「お願いです。あず……お姉様、赦してください。乳首がちぎれちゃう……」

「これくらいでちぎれたりしないわよ。すこしくらいの傷は瞬間接着剤でくっつくしね」
「そんないい加減なこと……ぎひい！」
　着けたばかりのワニグチクリップを引っ張られて、あたしは三度目の悲鳴をあげた。
「経験者が言ってるの！　信用できないの？」
　え……？　よくよく観察すると。東さんの乳首は左右がアンバランスで色も微妙に違う。
「……ごめんなさい。信じます」
「ふん。ドMのくせに、これくらいでギャアギャア泣き喚いちゃって。わたしに勝つんじゃなかったの？」
　そんな意味で言ったんじゃない。でも、そう聞こえたかも。
　あたしが泣き叫ぶと、たとえば神田先生とか長尾さんだったら悦ぶんだろうけど、東さんは勘にさわるみたい。だから、だろう。
　パチン！　バネのいきおいで、一気にワニグチが閉じた。閉じて、刃先が乳首に突き刺さるのが、はっきりわかった。一瞬遅れて、落ちた錘がタコ糸に引き戻される反動で、乳首が下に引っ張られると同時に、突き刺さった刃先が（ほんとうは、一ミリにも満たないんだろうけど）縦に切り裂いた。

あたしは、さっき以上に大声で絶叫した。
「はわわわ、はわわわ……」
これで終わった――とは、思ってない。あたしが誰かを責める立場でも、女の一番敏感なピンポイントを見逃しはしないし、とどめの一撃に最後まで残しておく。
東さんは肘をついて寝そべり、手と顔をとどめの一撃に近づけた。右手には注射器が握られている。
「ふふふ……ドMのマゾミちゃんは、これを待ってたのよね？」
あたしは弱々しくかぶりを振っただけで、なにも言わなかった。どう答えたら手加減（たとえば、そっと閉じてくれるとか）してもらえるかも、考えていなかった。
これから銃殺されるって囚人が泣き叫びもせず、淡々と街中を引き回される。そんな動画を見て不思議に思ったこともあったけど、今なら、あの人たちの心理を理解できる――なんて言ったら、人権団体から叱られるだろうか。
「急におとなしくなったわね？　素直な態度に免じて、一回だけチャンスをあげるわ」
「え……？」
血の池地獄から蜘蛛の糸を見上げる心境。

「この吸引器具を使うか使わないか、あなたに選ばせてあげる」
「使わ……」
　即答しかけて思いとどまった。よく考えなくちゃ。吸引されなければゴム環で締めつけられることもない。でも、そんな単純に考えていいんだろうか。
　被虐者に選択させるときは、必ず意地悪な罠が隠されてる――と裏読みするのは、ＳＭ小説の読み過ぎだろうか。
（あ……？）
　東さんの横にゼリーのチューブが転がってるのに気づいた。吸引器具に塗ったやつ。キシロカイン軟膏って書いてある。それってプレイに使うローションじゃないよね。たしか、痒み止めとか……そうだ、局所麻酔の薬だ。
　じゃあ、この乳首。局所麻酔されてて、この劇痛？
「……使ってください」
　麻酔なしで手術を受ける人なんていない。
　東さん、唇の端を吊り上げて嗤った。牙が見えたような気がした。
「ふふ……中途半端に賢いと、せっかくの慈悲を素直に受けられないのよね」
　東さんは軟膏を吸引器具の縁に塗った。ク

リトリスの包皮を左手できゅるんとめくって、吸引器具を押しつける。ポンプに吸引されて、クリトリスがペニスみたいに伸びて膨れる。その根元を黒いゴム環で絞られる。
　上体を前へ倒されてるから、その一部始終が厭でも見えていた。赤ちゃんのオチ●チ●（は、剥けてないけど）くらいに大きくされたクリトリス。充血して、ワニグチのギザギザが咬んだら破裂するんじゃないかってくらい、ぱんぱんになってる。空気に晒されて、すっかり乾いて……あれ？　軟膏が塗られてない？
　軟膏は、たしかに吸引器具の縁に塗られて……縁は、クリトリスには触れてなかった。
「あーっ！」
　思わず声に出しちゃった。
「騙したんですね。麻酔を塗ってもらえると思ってたのに」
「誰も、そんなことは言ってないわよ」
　東さんの唇から、また牙がのぞいた。
　うう……あたしの早トチリだけど。でも、絶対に罠だよ。
「ひどい……ひどいよ。嘘つき。意地悪……」
　絶望の中で見つけた最後の希望を打ち砕かれて、あたしは泣いてしまった。

「今のは聞かなかったことにしてあげる。コーチを侮辱したんだから、本来は体罰を追加するところよ。ほら、ありがとうは？」
「あ、ありがとうございます……」
　感謝の言葉を強制されて口にすると、ますます涙がこぼれる。
　涙でぼやけた視界の中で、凶暴なワニグチがじりじりと近づいてくる。クリトリスを呑み込んで、先端が包皮をさらに押し込んで。くるっと回転した。水平になったワニグチがゆっくりと閉じられて、粘膜に咬みつく。
「ぎゃはっあああああ……！！」
　腰が跳ねて、自分で劇痛を増幅してしまう。目の前がまっ赤になって、白熱した星が飛び交った。
「……あああああぁぁぁっ」
　ぺしゃんこに潰されたクリトリスにギザギザが食い込んでるのが見える。血がにじんでる。出血のせいではないと思うけど、クリトリスが白くなってく。
　クリップのツマミに結わえられてる輪ゴムを、東さんが引っ張った。
「あがが……ぎゃはあ！」
　上に引っ張られただけじゃない。ワニグチクリップ全体がすこし回転してクリトリスを

えぐった。だから、わざわざ水平にしたんだ。東さんの悪意は徹底してる。
　東さんは先生にされたことを忠実におさらいしてる――んじゃない。わたしに勝てるようにしてあげるって、東さんは言った。つまり、ここまで厳しい責めは受けてない。錘も輪ゴムも東さんのアイデアだろう。
　輪ゴムが引き伸ばされて、乳首を咬んでるワニグチクリップの錘に結びつけられた。
「ひぎいいい……！」
　あたしはできるだけ上体を折ってみた。乳首とクリトリスの距離が、すこしだけ近づく。その少しで、劇痛が激痛くらいにはやわらいだ。
「お姉様……」
「なあに？　もっと虐めてほしいの？」
「この錘とか輪ゴムとか、お姉様はされてないんですよね？」
「そうよ。お望みどおり、あなたはわたしに勝ったわよ」
「でも、これ……だいじょうぶなんですか？後遺症とか残りませんか？」
「先生は、大丈夫だっておっしゃったわ」
　てことは、事前に先生と打ち合せしてる。
「最初から、あたしにはこうするって決めて

たんですか？」
　東さん、しまったという顔をした。けど、すぐに開き直った。
「それが、どうしたの？　不満なら、即興で責めを考えてあげましょうか？」
　厭だ。いくらあたしが真性マゾでも、もう限界。だいたい、苦痛系は好きじゃないし。
「……いいです」
「そう、もっと虐めてほしいのね？」
　曖昧な言い方だと（わざと）誤解されるって気づいた。
「不満じゃないです。今のままでじゅうぶんですから」
「ふうん。こんなにひどい体罰を受けて満足してるのね？」
　どう答えても、あたしを辱めるほうへ虐めるほうへ捻じ曲げられる。
「……はい」
　あたしは、やけくそで答えた。
「あら、そう？　それじゃ、ワニグチクリップは着けたままにしておいてあげるわ」
　どうせ、そうするつもりだったくせに。
　東さんは立ち上がって、神田先生の座ってるベンチへ行った。なにか話してるけど、聞こえない。

東さん、やおら水着を脱ぐと床に座った。知子さんと同じ座り方。後ろから見てるので、細かいところまでわかる。脚を直角に開くだけじゃなくて、踵を立ててヒップに乗せてる。あれだと、簡単に性器を嬲ってもらえる。後ろにまわした手は肘の上を握って、セルフ高手小手。自分の意志で抵抗を放棄する（ことを強要される）ってのも、すごくマゾヒスティックだよね。

先生は東さんを放置して、あたしのほうへ来た。え、なに……？

「これからミセコに褒美をやるが、おまえに見られるのは恥ずかしいとさ」

そうとも読めるね。でも、名字のほうは『おかして』みたいな強引読みができない。なんて考えてると。

東さんが脱いだ海パンを、頭からかぶせられた。脚のところからツインテを引っ張り出されて、ふたつのリボンをひとつに結び直され、ウエストの紐を首の下で絞られると、即席の全頭マスク。東さんの体臭をもろに嗅がされる。

あれ……？　この水着、べちょべちょに濡れてる。東さんは一度もプールにはいってないのに。しかも、全体が濡れてるんじゃなく

てクロッチのとこだけ――これ、水とかおしっこじゃない。微妙に甘酸っぱい（いやでも唇にふれる）。エッチなお汁だ。こんなにたくさん。しかも粘ついてる。

東さんたら、あたしを虐めながら興奮してたんだ。と、思ったら――東さんへの反感が急速に溶けていった。

全部が全部じゃないかもしれないけど、東さんがあたしを蔑んでたのはプレイていうか、あたしを虐めるための演出だったんだ。

あたし自身は、いわゆるイジメをしたこともされたこともないから、イジメの当事者にしてみれば脳天気な考え方かもしれないけど。イジメをしてる人は、本気で面白がってるとしても、性的な興奮はないと思う。そもそも、本気で面白がってないんじゃないかな。イジメの本質は異質性の排除だとか、本だかどっかのサイトで見たことがある。自分と同じでない、あるいは自分に理解できない人を本能的に排除するんだそうだ。

たとえば。あたしは蛇もミミズも嫌い。ゴキブリもムカデも嫌い。トカゲは、ちょっと可愛い――のは、おいといて。そもそも、延々とこんなこと考えてられる状況じゃない。乳首もクリトリスも悲鳴をあげっぱなし。

とにかく。そういう嫌いな虫からは逃げる。でも、人によっては虫を殺して捨てるだろう。対象が虫でなくて人間だったら、イジメになるんだと思う。虫を殺して快感に浸る人がいたとしても、絶対にその人はサディストじゃない。

サディストは、マゾを嫌いな虫としては扱ってない――と、思う。雌豚とか奴隷とか言いながら、根っこでは人間として扱ってるはずだ。じゃないと、獣姦とか虫姦になるでしょ？

イジメがエスカレートして性的なイジメになるってのもあるから、この問題はつつかないけど。

東さんのあたしへの仕打ちが、そういうイジメじゃなくて、あたしをマゾとして扱ってくれて、それで自分も性的に興奮してくれてた。そう思うと、この劇痛もお姉様の愛の証しに思えて――きたりはしないけど。あたしの苦しみがお姉様を愉しませてる、性的に興奮させてるとしたら――お姉様の望むようにふるまいたくなる。

サルグツワもせずに、好きなだけ泣き叫びなさいっていうのは。あたしが（ひとり遊びで登場させる想像上の）サディストだったら、

虐めてる子がけなげに突っ張るのを見てゾクゾクするだろうな。で、そういう強情な子は、もっと厳しく責めちゃう。
　あ……今、子宮がぴくぴくって痙攣した。熱いお汁が、粘っこいのが、とろーっとバギナからしたたり始めた。
　だからといって、劇痛が軽くなったりはしない。でも、もっと痛くされたいなんて、ちょびっとだけ思っちゃったりする。でも、そのときは。もっと厳しく拘束して、あのサルグツワのマスクもしてほしい。じゃないと、声帯が破けちゃう。
　はあ……どんだけマゾなんだ、あたしって。
「あん、あん、あん、あん……」
　お姉様の喘ぎ声で、あたしはどっぷり浸かってた思考から浮かび上がった。
　ぱん、ぱん、ぱん、ぱん……肉と肉とがぶつかり合う音。リアルで聞いたのは、これが初めて。自分のときには鳴らなかった。それとも、鳴っていても気づく余裕がなかったんだろうか。
「逝く……オマ●コ、逝っちゃう！」
　うっわー。ふだんの清楚で上品な東さんからはもちろん、あたしを虐めてた高ビーなお姉様からも想像のつかない、卑猥な言葉。

どんなふうに犯され――てるんじゃないよね。ＳＥＸしてる？　媾合ってる？　視界を遮られてるぶん、妄想がむらむら。
「逝く、逝く、逝く……逝っちゃうう！」
ぷつっと糸が切れる音を聞いたような錯覚。音も声も途切れて。はあはあという、二人の荒い息だけが広い空間に吸い込まれてる。
そのあとすぐに。お姉様の手であたしは海パンの全頭マスクをはずされて。ワニグチクリップからも解放された。逝って満足したせいか、お姉様の手つきはすごくやさしかった。
ゴム環もはずそうとしてくれたんだけど、きつく食い込んでいるし、先っぽは腫れているし、抜き取るのは無理。
「ちょっと痛いけれど我慢してね？」
先が細くなった超小型のハサミみたいのを環と肌のあいだにこじ入れて、バチン。切り取っちゃった。乳首は痛いってより窮屈なだけだったけど、クリトリスは皮を切られるんじゃないかとハラハラドキドキだった。
ゴム環が切り取られると血流が回復して、先っぽがじいんと痺れた。そこに沁みる消毒薬を塗られたから、あたしは（甘えて）悲鳴をあげちゃった。
抗生物質と麻酔剤の軟膏を塗ってくれたの

で、痛みがすこしやわらいだ。
「これって、エッチぽいのよね」
　なんて言いながら、最後に傷テープを貼ってくれた。たしかに――『裸＆傷テープ』とか『裸＆絆創膏』で検索すると二次元も三次元も十八禁の画像がしこたまだね。
　もう下校時刻を過ぎてたけど、バスケ部の人に見られるとまずいので。先生だけが外へ出て、お姉様のスマホに連絡があってあたしが下りて、最後がお姉様。
　今日はアリバイ作りの手が込んでた。車で街へ出て、塾帰りのお姉様と偶然に出会ったことにして、二人そろって学園バスで寮へ帰った。
　部屋へ戻って、お姉様はシャワーに直行。あたしは傷だらけなのでパス。ご飯を食べたら、このまま（パジャマには着替えるけど）寝る。
　それにしても、驚いたなあ。まさかお姉様が先生の生徒だったなんて。すごい偶然……じゃないのかもしれない。進級のときに部屋のペア替えがなかったのは異例。もしかして、転入した最初から狙われてた？
　でも、あたしは。知子さんみたく前の学校のサド教師から申し送りがあったわけじゃな

いし。お姉様なら、なにか知ってるかな。
「あの……お姉様に聞きたいことが……」
　シャワールームから出てきたお姉様に、おずおずと切り出したんだけど。
「やめて！　その呼び方は、ここでは使わないで」
　すんごい剣幕で叱られた。
「日常生活にまで、あんな……あんな世界を持ち込まないでちょうだい」
「……ごめんなさい。気をつけます」
　どういうことなんだろ。東先輩にとっては、あれは異世界の出来事なのかな。
　そういえば。ＳＭプレイの職業的女王様がプレイ以外の場で、ドＭのお客様にプレイのときと同じ態度で接したら、すごく怒られたって――ほんと、あたしって耳年増。
「あなたを嫌ってるんじゃないのよ。それに、ほんとうのことを言ってしまうと、補習は厭だけど……それに馴らされていってる自分が、もっと厭なの」
　ややこしいけど、なんとなくわかる。
「だから、神田先生から逃げたいから、四年制へ進学するの。塾に行っているあいだは、補習を受けずにすむし」
　東さんは二段ベッドの下側に腰かけた。そ

こは東さんのスペースだから、並んで座るのは厚かましい。でも勉強机からだと距離があるし、見下ろす形も居心地が悪い。クッションを持ち出して床に座れる気楽な雰囲気でもない。あれこれ迷って、椅子に座ったまま、東さんに向かい合って、両手をそろえて膝に置いた。
「岡下さんには、そのぶん負担をかけちゃうことになるけど。ごめんなさいね」
　謝らなくていいです。あたしは、先生の補習を悦んで受けてるマゾっ娘ですから――とは言いにくい、重たい雰囲気。
　それに。ほんとのほんとに本心から悦んでるかっていうと、微妙。体罰とセクデラの課外補習を言い渡されたのが、ええと……十日前で。ロストバージンが一週間前で。なのに、こんなハードな調教を受けてる。どこまで行っちゃうのか、考えると怖くなってくる。
「あの……そんなに厭なのに補習を受けなくちゃならないって、やっぱり弱みを握られてるとか？」
　東さんが、ばっと立ち上がった。やば、つついちゃいけなかったかな。
　でも、すぐに座った。一瞬だけ見せた怒りの表情は消えていた。

「いずれ、神田先生がばらすだろうから、自分で言っておくわ」
　東さんは、あたしを見つめているようで、わずかに視線をずらして。ぽつりぽつりとモノローグ。
「実を言うと……わたしは、あなた以上に遊んでたの。自縛とかＳＭじゃないけれど」
　●二の夏休みに、海でナンパ・デビューして。初めての人の友達とか、その知り合いの先輩とかと、くっついたり離れたりして。三年の秋に妊娠発覚して。一時は進学が危なかったけど、休日も外出禁止とか実家へ帰るときは両親が送り迎えするとかの厳しい条件（ほとんど軟禁）で認められた。
　このときに職員会議で東さんをかばったのが神田先生。
　いちおう、それだけで。あたしみたいに、誰かに知られたら困る秘密を握られたわけじゃない。でも、●校進学後に、なし崩し的に神田先生に抱かれて。
　そのときは、先生も東さんを本格的に調教するつもりはなかったみたい。というのも、同学年に野原知子さん（今の姓は長尾）がいたから。あたし以上のドMで実践派。
　東さんが最初の補習を受けさせられたのは、

知子さんが退学して長尾さんの専属になった後だった。
　その半年後に、あたしが中途転入してきた。神田先生は、やっぱり最初から、あたしに目をつけていた。
「あなたも、長ったらしい心理テストを受けさせられたでしょ？」
　事前に性格を把握して相性のよい者を寮の相部屋にする――というのは名目で、マゾ探しなのだそうだ。
　神田先生は理事長の甥で、知る人ぞ知る裏ボス。だから、心理テストの導入だろうがプールの無断使用だろうが、やりたい放題。
　あたしに予備倉庫の鍵を渡して、すぐには返せと言わなかったのも、すべて罠だった。
「あなたのおかげで、わたしはワンポイント・リリーフみたいな存在になったけれど。でも、進学したら解放してもらえる保証はない。それどころか……知子さんみたいなことになるかもしれない」
　●校を卒業したときには、親の同意がなくても結婚できる年齢になってる。
　親の七光りがあるにせよ、裏ボスを張っていくには、闇取引とか貢物とかが必要だろうとは、あたしでも見当がつく。すでに何人も

の生徒が強制結婚とか、もっとおだやかには卒業後に住み込みの就職で、サディストに献上されてるらしい。ここらは、東さんも詳しく知らない。知っているのは知子さんのことと、知子さんの入学前に卒業した先輩の消息だけ。その先輩はＮＧ無しのＡＶ女優としてマニアックな人気があって、私生活でもプロダクションの社長に飼われている。

あたしの未来は、どうなるんだろう。知子さんの場合は、親が諦めてる部分もあったかもしれない。でも、両親にとって、あたしはなにも知らない純真無垢な少女で、中途退学の結婚なんて許すはずがない。社会的にもそれなりの地位でお金にも困ってないから、札束ビンタも通用しない。とすると――あと四年、卒業までは補習が続くのかな。そんな遠い未来のことなんて、まるきり実感が湧かない。

今、はっきりしてるのは。ダメージが大きいので、明日の補習がお休みだってこと。ていうか、東さんの経験では、補習の連チャンはめったにないんだそうだ。

　でも、土曜日の補習は試験週間でも休みにならない。しかも、今日は朝から。
　東さんは原則外出禁止のところ、監視付でショッピングして、午後からはひとりで進学塾という届出をして、養護教諭の三沢瑞希先生に車で街へ連れて行ってもらった。
　あたしは帰寮予定時刻の記入だけで、ふつうに学園バスで街へ出て。誰かの結婚式にお呼ばれしてるんですよって顔で、街で最高級のホテルに堂々と（内心ドキドキ）はいったら、三沢瑞希先生がロビーで待っていた。
　実は、三沢先生も神田先生の教え子。薔薇組で、最初の補習が最終学年になってからだったというから、超奥手？　レズ寄りのバイだとわかったので、神田先生の命令で進路をちょい変更。本人の希望どおりに七白学園の二年制に進学したけど、家政科ではなくて教諭養成課程を選択したんだそうだ。
　養護教諭が手下なら、安心して（？）生徒の身体を傷つけられるよね。
　先生に連れられて行った先は、一泊ン十万円のロイヤルスイート。４ＬＤＫのマンショ

ンより広い。
　そして、男の人が――応接セットに三人と、会議机みたいなとこに五人。プラス神田先生と東さん。場所が場所なだけに、先生もジャージではなく、ぱしっとスーツで決めてる。八人のうち二人は、知っているもなにも、最初の補習でエッチのコーチをしてくれた大久保のお爺さんとメタボの安田さん。
　まあね。覚悟はしてたよ。今日は性教育の実技指導だって予告されてたもん。
　あたしの経験値は五人だけど、今日は一気に二倍以上になるのか。ん？　レズ寄りのバイってことは、三沢先生との絡みもありそう。レズは初体験。ちょっとワクワク。まだ（もう、と言っては失礼）二十六歳だっていうから、先生ていうよりＯＧみたいな親近感があるし。
「では、補習を始めるぞ」
　部屋の隅っこにぼんやり立っていた東さんが、男の人たちの前に進み出て、床に座った。
「昌美ちゃん、あなたもよ」
　東さんに言われて、あたしも並んで座った。
「よろしくご指導のほど、お願いいたします」
　て、土下座。プレイ前の牝奴隷のご挨拶ってやつだ。あたしは以下同文で土下座だけし

とく。
「おまえは、よく躾けられておるのう」
　大久保のお爺さんがお姉様の後ろにまわって――スカートの裾を持ち上げた。
「ああん……」
　死角になって見えないけど。ヒップを撫でられるか、もっと直接的なことをされてるらしい。
　逃げたりはせずに喘ぐのが、こういう場でのお作法なんだと、インプット。
「マゾミも見習えよ」
　ぺろんとスカートをめくられて、ショーツのゴムから手を入れられた。掌が生尻を撫でて、うわ、指がクレバスをなぞってる。
「ああん」
　我ながら棒読みに聞こえる。けど、教育的指導とかはなかった。
「ふたりとも立て」
　この場で全裸（神田先生の言い方だと、素っ裸）になれと命じられた。
「まずは、ミセコが手本を見せてやれ」
　メタボさんがスマホをいじると、大音量のメロディが流れた。扇情的っていうか、コントなんかでエッチなシーンに使われる定番。
　お姉様が曲に合わせて踊るっていうか、身

体をくねらせる。
　身体をくねらせながらリボンタイをほどいて、ぽーんと投げ捨てる。がばっとスカートをまくって、いきなりショーツ？　と思わせといて、ソックス。それから、ほんとにショーツ。腕をジャンスカの中に入れて、先にブラウスを抜き取ってからブラジャー。
　そして曲の区切りで、すとんとジャンスカを落とした。フィニッシュポーズは、例の受虐待ち。両手を頭の後ろで組んで、脚を開くやつ。お姉様の股間を目にするのは、これが初めて。やっぱりパイパンだった。
　おまえもやってみろと神田先生に言われて。男の人たちに向かい合って立ったんだけど。
　駄目。恥ずかしさよりも馬鹿らしさが勝って。
「ぷくくくく……」
　笑っちゃった。
「しょうがないやつだな」
　先生も苦笑い。
「ミセコは鞭に怯えてなんでもするが、マゾミは『饅頭怖い』だからな」
　なに、それ？
　振付なしでとっとと素っ裸になれと、あらためて命令されて。いそいそ――じゃなくて、

仕方なく、さっさと服を脱いだ。たたんだりはせず、お姉様を見習って放り投げとく。
「それでは。最初はそちらの三人に、マゾミの指導をお願いします」
　瑞希先生が、あたしを小さな会議机のほうへ押しやった。神田先生は、お姉様をソファのほうへ。
「この子は、まだ男に抱かれたことがないの。基本から叩き込んでやってね」
「えええ？　処女かね。驚いたな」
「バージンではないわ。男に抱かれたことはなくても、男に犯されたことはある。どの穴もね」
「除膜式はちょうど二週間前だぞ」
　ソファのとこからメタボさんが茶々をいれる。
　あたしはあたしで。瑞希先生の言葉に苦笑しながら感心してる。たしかに。座禅転がしとかばっかで、抱かれてはいない。
「正常位から教える必要がありますか？」
　三人のうちではいちばん若い――といっても、三十歳はとっくに過ぎてる感じの中肉中背の人が瑞希先生に訊ねた。
「お願いしますわ」
　では――と、あたしは三人に囲まれる形で

ベッドルームへ連れ込まれた。
　なに、このベッド。ダブルダブルサイズのが、どかーんと二つ並んでる。プロレスのリングが作れるんじゃない？
　ベッドに四人で上がっても、余裕に広い。
　すぐにお姉様と五人の男の人たち（言葉の座りが悪いなあ）も来て、さすがに全員ではギュウギュウギュウって犇めくので、あたしとお姉様と、実技指導のコーチが二人ずつ。
　あたしは中肉中背さんの指導で大きな枕を二つ折りにして、その上に腰を乗せてあお向けに寝た。膝を立てて広げると――早くあたしを串刺しにして、みたいな卑猥なポーズ。
　中肉中背さん、あたしを見下ろしながらゆっくりと服を脱いだ。裸になって、あたしの横に添い寝して。おもむろにバストに手を伸ばしてくる。
　ソフトタッチの愛撫。まだふれられないうちから、乳首が勃ってきた。指が乳輪をなぞって、期待をはぐらかして麓へ下りてく。それを何度も繰り返してから。いきなりおおいかぶさってきた。左肘で上体を支えて、あたしに体重をかけない。それから両手でふたつの乳首を同時にくすぐった。
「あふ……」

自然と声が漏れてしまうくらいの気持ち良さ。
あ……右手が乳首から逃げてった。と思うまもなく脇腹をくすぐられて。くすぐったい感触が太腿まで下りて、中芯へ向かった。
「ああんん……」
クリトリスを包皮の上からくすぐられて、快感よりももどかしさ。もっと激しく弄ってほしいって――サディスティックな愛撫に馴らされちゃってるのかな、あたし。
もどかしい思いが、そのまま欲求不満の蜜になって、とろとろとクレバスににじむ。
中肉中背さん、潤滑はじゅうぶんと思ったみたい。
「それじゃ挿れるよ」
わざわざ断わって、ペニスをあたしのクレバスに押し当てた。
コンドームは着けてないけど、それはかまわない。強制的な生理が始まった日から、ピルを飲み始めてるので、妊娠の心配はない。この人は、あたしには行きずりの初対面でも、先生の知り合いなんだろうから、病気もだいじょうぶ（だろう）。余計な心配はしないで、実習に専念できる。
ペニスが膣口に突き当たったのを感じてす

ぐ。ズニュウウ……て、はいってきた。
「あ……」
　あまりにスムースなのに驚いた。ちっとも痛くなかった。引き攣れるような感覚はあったけど、それがすこしだけ気持ちいい。
　でも……それ以上には気持ちよくならなかった。
　にゅぶっにゅぶっにゅぶっ……エッチな音がお股から聞こえて、引き攣れるような感覚が振動して、すこし気持ち良くて。それだけ。クリトリスを刺激されるときの切羽詰まった快感がない。肉体的には冷めてくけど、ＳＥＸしてるんだ、男の人に抱かれてるんだっていう精神的な興奮は続いてて――なんかチグハグ。
　それよりも。手が手持ち無沙汰。縛られてたら動かせないから、それでいいんだけど。
　ええと、こういうときは……男の人にしがみつくとか、それよりも。
　勝手なことをして叱られないかなって、おっかなびっくりで。右手を男の人の腹の下というか自分の恥丘あたりに差し挿れてみたら。
「うああ……」
　すごく、いい。男の人のお腹で手が揺すられて、クリトリスに触れてる指が勝手に動い

てくれる。
　一発で肉体に火がついちゃった。左手でバストをぎゅううってつかんで、人差し指で乳首をコリコリ。うう、右のバストも滅茶苦茶にしたい。でも、手は二本しかない。
「ああん、あん、ああん……」
　もどかしくて、声が漏れちゃう。
　と、右手をつかんで引っこ抜かれた。
「こうするのよ」
　瑞希先生があたしの両脚をつかんで、男の人の腰に絡ませた。
　あ、そうか……あたしは、胡坐みたいに脚を組んで、男の人に腰を押しつけた。恥骨と恥骨とがぶつかり合って、クリトリスが包皮ごと強くしごかれる。
「すごい……これ、いい！」
　両手でバストを思いきりこねくりながら、さらに腰を押しつけた。包皮がすこしめくれて、男の人の剛毛が粘膜を逆撫でする。
「いいっ、いい……もう、駄目え！」
　クリトリスからスパークした快感が尾底骨に突き抜けて、脳天まで駆け抜けた。
「うおお、こっちもすごいぞ」
　中肉中背さんの声は、そんな切羽詰まってなかったけど、バギナの中でペニスが痙攣し

て、びゅくびゅくっと震えるのを感じた。射精したんだ。
「二人とも満足したのなら、それでもかまわないんだけどね……」
　瑞希先生、なんか溜め息をついてる。
「今日は型を教えるだけになりそうね」
　ちょい年配のスリムな人が、中肉中背さんとタッチして交替。
「半月前までは生娘だったのなら、膣逝きはまだ無理だろう」
　膣性感のことよね？　クリトリスよりずっと奥深いって知識だけはあるけど。既婚者（毎晩ＳＥＸ……でもないか）でも膣性感を知らない女性のほうが多いって話だし。たしかに、あたしには無理かも。
　でも、いいもん。クリトリスは男の人のペニスなんでしょ。ちっちゃいから神経が密集してて、男の人より快感が強い。それで……前立腺のドライオーガズムに相当するのがＧ性感だっけ？　あれ？　それじゃポルチオってのは？
「きゃ……！」
　足首をつかんでスリムさんの肩に乗せられた。ぐうっとスリムさんがのしかかってきて、あたしはマングリ返しにされちゃった。

「これで倉石さんとは穴兄弟ならぬ汁兄弟ですな」
　中肉中背さんの精液があふれてるバギナに、ズボッとスリムさんのペニスが突き立った。あたしの身体を二つ折りにして、奥まで貫く。膣の奥にペニスが当たるのが感じられた。
　ぶじゅ、ぶじゅ、ぶじゅ……さっきよりずっとエッチな音がして、あたしの奥まで掻きまわされる。
　けど、さっきより気持ちよくない。精液とあたしのお汁とが混じり合って、お股全体がぬるぬるするのが、ちょっと気色悪い。それに……身体を折り曲げられてるのでクリトリス宙ぶらりんだし、スリムさんの腕が太腿のあたりをブロックしてるので、自分でさわることもできない。
「この角度は、どうかな」
　ピストン運動を続けながら、スリムさんが腰を低くした。膣口が梃子の支点みたくなって、ペニスの先がお腹の裏側をこすった。ええと……これって、Ｇスポットを探してるんだろうな。申しわけないけど、なにも感じない。
　あれこれと角度を変えたり、浅く何度もピストンしたり、膣奥を突き刺したりしてたけ

ど。あたしは無反応。ほとんど海老責めにされて、腰が痛くなってきた。
「あああああーっ！　いやよ、逝きたくなんかない。もう、やめてよ！」
　お姉様の甲高い悲鳴。ていうか、喘ぎ声と泣き声がひとつになってる。
　隣のベッドを見ると――肩で逆立ちをしてるお姉様の脚の間に男の人が立って、杭を打ち込むみたいに激しく腰を上下させてた。腰を動かしながら、お姉様の膝を抱いて逆方向に揺すっている。
　ばしっ、ばしっ、ばしんっ……ほんとに杭を打ち込んでるみたいな重い音。
　勃起してれば上を向くペニスを無理に押し下げて挿入してるんだから、バギナには強い圧力がかかっているはず。男の人の太腿の裏が下腹部をごりごりこすってるから、クリトリスも揉みくちゃにされてる。
　これじゃ、クリトリス派だろうと膣派だろうと、ひとたまりもない。男の人が腰を上下するたびに、どろっとしたお汁がバギナから掻き出されてる。
「いやあ……逝きたくない！　赦して、やめて……！」
　お姉様の懇願に負けて、男の人がぴたっと

動きを止めた。
　ブウウウウウンン……はっきりとモーター音が聞こえる。制止した股間をよく見ると、アヌスにバイブが突き刺さってた。
「こっちも止めてやろう」
　一瞬の静寂は、お姉様のもどかしそうな声で破られた。
「ああん……もっと虐めてえ！　やめないでええ……！」
　腰をくねらせながら、本泣きしてる。
「やめるのか、やめないのか、どっちなんだ」
「やめないでくださいいいい」
　男の人は、さらにお姉様を追い詰める。
「逝きたいのか、逝きたくないのか」
「逝きたいです。逝かせてください……お願いですう」
　男の人が満足そうにうなずいた。
「やっと素直になったな――そら逝け。逝ってしまえ」
　男の人が杭打ち作業を再開した。さっきより、ずっと激しくて速い。
　ばん、ばん、ばん、ばん……
　ブウウウウウウウウンン……モーターの音も、かすかに聞こえた。
「うあああああ、ああああ……弾けるう。弾け

る、弾ける、弾ける！」
　絶叫して、お姉様の背中が反りかえった。それでも、男の人は杭打ちを続けてる。
「あああああああぁぁーっ！」
　絶叫がフェイドアウトして。
　男の人が手をはなすと、お姉様はベッドに崩れ落ちて、そのまま動かなくなった。
「おっと。俺まで見とれてしまった」
　スリムさんが、さらにのしかかってきた。あたしは、ほとんど百八十度まで曲げられた。
「開発は金山さんにまかせて、俺は埒を明けさせてもらうぞ」
　勢いをつけて深くリズミカルに腰を動かしはじめた。
　ぱん、ぱん、ぱん、ぱん……蟻の戸渡に玉袋が打ち当たって、乾いた音を立てる。
　男の急所をぶつけて痛くないのかな――なんて他人の心配をしてるうちに、スリムさんは埒を明けた。
　三番手は、大久保さんよりお爺ちゃんの人。そして、三人の中ではいちばんペニスが大きい。それで、神田先生のペニスと同じくらいに見えるということは――先生は偏差値六十くらい？
ただし勃起角度は、先生と比べものにならな

い。前へならえ――つまり水平。
　とはいえ、亀の甲より歳の巧。このおじいさんに、あたしはヒイヒイ言わされた。お姉様みたく感じたって意味じゃなくて。後背位に始まって、立ちバック、正面から抱き合って挿入して、そのまま対面騎乗位に変化して。結合したまま向きを変えて背面騎乗位。さらにクルクルと回されて。上体を起こしたお爺ちゃんの膝に乗せられて大開脚で揺すられて。最後は、また後背位から脚を抱え上げられて、体育の手押し車みたいに床を四つん這い（の手だけ）で延々と歩かされた。『後ろ櫓』とか『御所車』とか『乱れ牡丹』とか体位の名前を教えられたけど、覚えてない。
　でも、まあ。性教育の実技指導では、あったなあ。
　三人の指導が終わったあとは。瑞希先生も神田先生も加わっての、男九人に女三人の大乱交。二穴三穴当たり前って、どっかのディスカウントショップかい。
　男の人たちが交替でシャワーを浴びて服を着たのは、午後二時を過ぎてから。
　でも、あたしとお姉様はさらに、瑞希先生から実技指導をされた。それは――レズ。
　マンションのＬＤＫみたいに広い部屋のま

ん中に会議机が据えられて、その上がレズショウじゃなくて実技指導の舞台。
　二人して向かい合って座り、瑞希先生の指示で、抱き合ってキス。
「んむ……」
　お姉様、きっちり舌を挿れてきた。
「マゾミ、口を開けて。いやらしくネチョネチョグチョグチョしなさい」
　なんちゅう指導よ。でも、素直に従う。今日はまだ登場してないけど、神田先生の基本は縄と鞭。鞭はともかく縄は好きだけど、体力的に今日は勘弁してほしい。
　抱き合ったまま机の上に寝て。お姉様はあたしの身体を舐めまわしながら身体をずらしていって、軽くクンニであたしを喘がせてからクルリと半回転。お姉様の股間があたしの顔に。ので、あたしもクンニ。
　ここで指導がはいった。横向きに寝て。お互いに脚を折り曲げて腿と腿とを絡み合わせる。ヒップを抱きかかえて、股間深くに顔を突っ込む。
　間近に見るお姉様のラビア。ピンクと紫を混ぜたような、濃い色をしてる。のが充血して、ぷっくら膨らんで、クレバスから三センチくらいはみ出てる。バギナの中まで見えち

ゃってる。サーモンピンクてよりもサーモンレッド。盛り上がった膣口が、ぴくぴく蠢いてる。
　あたし、さらに顔を押しつけて舌を突き出して、膣口を直撃。
　びくんって、お姉様の腰が跳ねた。さんざ虐められてきたお姉様に一矢報いた気分。れろれろと舐めまわして、腰をよじって逃げようとするのを押さえこんで追撃。
「ひゃぶっ……ん！」
　お姉様の反撃。しかもクリトリスとのコンボ。電撃が尾底骨を直撃した。
　お返しをしなくっちゃ――再反撃ってニュアンスじゃなくて、素敵なプレゼントへのお返し。
　あたしも片手をクリトリスに持ってって。いきなり剥いちゃった。
「きゃあ……」
　お姉様の息がアヌスをくすぐった。ので、閃いて。あたしは舌でバギナを責め続けながら、顎を引いて鼻の頭でアヌスをつついた。
「いやあ……やめてよ」
　やめてってのは、やめるのをやめてという意味――だと、学習済み。なので、顎の上下に動かしたり、クリトリスをプチペニスみた

いにしごいたり。
　で、互いに攻め合って。あたしがお姉様を押し上げたら、お姉様があたしを引っ張り上げる。こういうのを、ウィンウィンの関係っていうんだっけ？
　もうちょっとで二人一緒に逝けそうってとこで、瑞希先生がストップをかけた。ああん、意地悪――じゃなかった。
「これを使いなさい」
　先生がお姉様に手渡したのは、ディルド。三十センチ以上の長さで、両側が亀頭の形をしてて、まん中に玉袋みたいな突起がある。
　お姉様が身体を起こしてあたしと向かい合って、両脚を大きく開いてあたしの脚とクロスさせた。つぷっとディルドを挿入して、玉袋を上にして握った。
「マゾミちゃん、おいでよ」
　あたしはお姉様にていうか、ディルドに向かってヒップをずらしてった。クレバスを割って、膣口に当てて。お姉様が手を前へスライドさせると。
　ずぷうっと、奥まで貫かれた。玉袋がクリトリスに押しつけられて……こっちのほうが気持ちいい。
　あたしは腰をにじらせて、お返しとばかり

にディルドをお姉様に押し込んだ。
　もうちょっとで玉袋がふたりのクリトリスに密着するってところで、お姉様があたしの恥丘を掌で押した。止まれって意味かな。
　お姉様が玉袋を握って。
　ずぐっ、ずぐっ……と、双頭ディルドをピストンさせた。
「んあっ……ん……」
　一往復ごとに、あたしのクリトリスとお姉様のとが、交互に圧迫される。
　双頭ディルドは勃起したペニスみたく反りかえってるけど、やわらかい素材なので、二人の膣の角度に合わせて曲がってくれてる。その弾力が膣壁の上側を刺激する。
「あああああっ……！」
　不意にお姉様が甲高く悶えた。
「ごめんね。わたし、もう駄目……」
　大きなピストン運動ではなく、ピンポイントを狙ってこねくりまわすような動き。
　Gスポットを直撃したんだな――と、置いてきぼりを食って醒めかけた頭で考えた。
「きいいいいいいいいっ……！」
　お姉様、のけぞって白目を剥いて。叫び終わると、くてっと失神しちゃった。
　人間の尊厳をぶち壊すような悶えっぷりだ

った。馴らされていく自分が厭だというお姉様の言葉が、実感をともなって理解できた。
　でも、あたしは――こんなふうに逝き狂えるお姉様が羨ましかった。

　個人的には不完全燃焼に終わった土曜日の実技補習。に続いて、日曜はマンツーマンの補習。
　お姉様は午後からほんとに進学塾で、午前中は体育補習でサボったぶんを取り戻す自習。
「あいつには、この補習は必要ないしな」
　膣逝きの特訓なんだそうだ。
　今日の教室は、プールでも超一流ホテルでもなくて、懐かしの予備倉庫。
　跳び箱の長手方向にあお向けに寝て、腰は跳び箱から突き出す。跳び箱を運ぶときの穴にとおした縄で、左右に垂らした腕を縛られ、折り曲げた足首も同じように縛られた。さらに胸の上と腰にも縄を巻かれて、身動きできなくされた。
　そして、待望の三点吸着ミニバイブ――じゃなかった。似ているけど、小さなスポイトの先の吸着部が金属製。ミニローターが仕込める大きさじゃないのに、電線だけはつながってる。

「これ……電気刺激ですか？」
「怖がることはない。今日は高電圧じゃなくて低周波だ」
　言ってる意味がわからない。
「ちょっと待ってろ」
　あたしが首をかしげてるあいだに、先生はどんどん準備を進めてく。三本の電線を小さなキャリーバッグくらいの大きさの箱につないで。箱のコードをコンセントに差し込む。箱っていうか制御装置？　スイッチとかテンキーをあれこれ設定して。
「つまり……こういうことだ」
「きゃうっ……ん？」
　ピリピリッと刺激が走ったのでびっくりしたけど、あまり痛くなかった。針の先でくすぐられたって表現すればいいのかな。ちょっと痛くて、すごく気持ちよかった。
　女のいちばん敏感な局部を刺激されたものだから、とろーっと蜜があふれてくる。
「こういうふうにもできるぞ」
　今度は、もろに指でつままれるような刺激。そうか。低周波治療器に『揉む』とか『叩く』って目盛があるのと一緒だ。電圧のかけ方でいろいろできるんだ。
　あたしの身体には、さらにいろんな物が取

り付けられてった。血圧を測るみたいな帯で二の腕を圧迫されて、下乳や太腿や喉にもペチャッとした電極を貼り付けられた。無理やりに腰を浮かしてヒップにも張られた。

アナルには、先が丸く尖ってて胴部が膨らんでて根元はすぼまってて、奥まではいりこまないように刀の鍔みたいのがついてる、通販サイトで普通に売ってるゴム製のアナルプラグを挿入された。いちばん太いところは四センチちかくて、挿入されたときは涙がにじんだけど、付け根だと二センチくらいだから、今のあたしには余裕すぎて物足りないくらい。でも、電線が伸びてるから、油断はできない。

「今日は本格的なトレーニングマシンを使うぞ」

先生はハードルを二つ持ってきて小さな万力で背中合わせにくっつけた。L字形の脚が逆T字形になったので――障害物走でこんなのを使ったら、蹴飛ばしても倒れないから大怪我しちゃう。リレーのバトンをハードルの背中の前と中間と後ろに、板と平行にガムテで固定した。

組立式の旗竿？　端っこがネジになってる金属棒をバトンにとおして、バイブをネジで固定した。極太ペニスそっくりなやつ。

ハードルを開脚したあたしの股間に寄せて、バイブを挿入。
「く、ぐうう……」
濡れてるけど、きつくて痛い。本物のペニスと違って胴体が凸凹になってるから、押し入ってくる一センチごとに、膣口をえぐられた。
最後に先生は、看板とかの錘に使う水入りのポリ容器でハードルの脚を固定した。
これ、手作りのファッキングマシンだ。だけど、動力は――ちゃんと準備されてた。演劇の大道具の加工にでも使うのかなと、深く考えたことのなかった電動ノコギリ。スプラッタ御用達のチェーンソーとか円盤が高速回転するやつじゃなくて、二十センチくらいのノコ刃がズコズコズコと出入するハンディタイプ。本体をハードルの端にぎっちり固縛して、バイブを串刺しにしてる金属棒をノコ刃に、小さな万力とビニールテープとで固定した。
電気のプラグは壁のコンセントじゃなくて、キャリーバッグに差し込んだ。
「これで細かな調整ができる。たとえば……」
ウィンウィンと小さな音を立てて、バイブがピストン運動を始めた。

「い、痛いです……」
　ごりごりと膣口をえぐられる。
「これくらいで弱音を吐いてたら、今日の補習は不合格だぞ」
　ウイイイン、ウイイン……ストロークが大きくなった。バイブが膣奥を突き上げる。
「きひい……痛い！　赦してください」
　あっさりとピストンが止まった。
「できるだけ苦痛をおさえるようにプログラムしてはあるが、おまえもすこしは根性を見せてみろ」
　プログラムって……？
　防声マスクで口をふさがれたので、疑問を訊ねるチャンスは失われた。
　アイマスクで視界も奪われて。
　耳栓を突っ込まれて、さらにヘッドホンかなにかで耳をふさがれた。
「すこしは聞こえるはずだ」
　うなずいたけど、遠くからささやいているくらいの大きさにしか聞こえない。
「誰もはいってこないように、俺が外で見張っててやる。おまえは膣で逝けるようになるまで頑張れ」
　鼻になにかをかぶせられた。こんな状況で窒息責めまで――されなかった。逆だった。

冷たい空気が鼻を包んで。吸い込むと、すごく息が楽になった。これって酸素？　どんなに激しく悶えても酸欠にならないための用心かな。
　ぺちぺちとお腹を叩かれて。数秒後に、引き戸が開閉するちいさなちいさな音。
　あたしは暗闇と静寂の中に放置された。
　膣で逝けもなにも、先生はスイッチを入れ忘れて――なかった。
「んんんっ……」
　いきなりバストを揉まれて、あたしはうろたえた。出ていくふりをしただけで、まだ先生がいたのかと思った。
「んぶう……」
　乳首からクリトリスまで軽い電撃が走った。
　それから、ゆっくりとバイブが浅い位置でピストン運動を始めた。
　先生が言ったプログラムって、こういうことだったんだ。
「んん、んん、んんん……」
　乳首とクリトリスをつまんで転がされてるみたいな感覚。に、ちょっぴり電撃スパイスが混じってて、すぐ逝っちゃいそうな快感。身体がのけぞって、括約筋がビクンビクンと痙攣したら。

低周波刺激が弱まって、マシンのスピードが上がった。うにゅんうにゅんと、バイブが膣の中で暴れはじめた。
「……」
すうっと快感が引いて。股間の苦痛がクローズアップされた。
そしたらピストン運動が止まって。また低周波刺激が復活。今度は、ヒップもバストも、わしわしと揉まれてるみたいな刺激も加わった。
「んんんんんっ……」
即効で逝きそうになると、またピストン運動が加速――痛いよ！
延々と、同じことの繰り返し。あ、厳密には同じじゃない。揉んだりつまんだりくすぐったり――低周波刺激のパターンはいろいろ。
真っ暗闇の中で、ごぐごくかすかなモーターの音しか聞こえなくて。
何十分が経過したのか、それとも何時間もなのかもわからない。あたしの感覚の９９パーセントは、快感と苦痛とに翻弄されっぱなし。快感はだんだん大きくなって、苦痛はすこしずつ減ってきてる。
ときどき、すべての刺激が止まるのは――あたしを休ませてくれてるのか、それともモ

ーターを休ませてるのかな。ローターだって、十分以上も使ってると熱くなる。
　もっとも。全休止の時間は短い。快感の余韻が冷めないうちに、マシンは動き始める。まるで、誰かがあたしの反応を観察してマシンを調節してるみたい。
　あ……実際、観察されてるに違いない。血圧を測るみたいな帯とか、一度も通電されてない喉の電極とか。これ、センサーだ。もしかするとアナルプラグも。ゴムだから電極なわけはないし、バイブでもないみたい。
　血圧は自分でコントロールできないけど。
　つぎに大きな波がきたとき。ぎゅうっと股間を突っ張りたくなるのを我慢してると、低周波刺激がすこしずつ強く、ピストン運動は小さくなっていった。括約筋の締まり具合で決められてるんだ――と、わかっても。
　括約筋を緩めたり適度に締めたりしてると、どんどんどんどん低周波刺激が激しく痛気持ちよくなってきて……。
「んぶう、んんん……！」
　どーんと大津波がやってきた。締めるなっても、それは無理。
　背中がのけぞって、バギナもアヌスも勝手に痙攣する。

たちまち低周波が逃げて、バイブが暴れ出す。
でも、押し上げられた波が大きかったので、すぐには快感が消えない。どころか……
「んんん！　んんん、むぶうううう一っ！！」
ズウンと重たい快感の杭を叩き込まれたというか。バギナ全体が溶けちゃったというか。ブラックホールに全身が呑み込まれたというか――これまでに体感したことのない、怖くて泣き出してしまいそうな快感が全身を貫いた。いや、貫いたんじゃなくて。尾底骨も背骨も脳天も、爆発して吹っ飛んで。スライムみたいな粘っこい快感の塊だけが、あとに残ってしつこく蠢いてる――そんな感じ。
これが膣逝きなんだ。クリトリス性感なんて、線香花火みたいにちゃちで一瞬のものに過ぎなかったんだ――薄れゆく意識の中で、あたしはしみじみと実感してた。